



# 甲虫ニュース COLEOPTERISTS' NEWS

No. 161



March 2008

静岡県内及びその周辺で採集したアリヅカムシ

原木直美\*・田添京二\*\*・野村周平\*\*\*

A List of Pselaphine Species Collected from Shizuoka Prefecture  
and Its Adjacent Areas

Naomi HARAKI, Kyôji TAZOE and Shûhei NOMURA

\* 〒438-0214 静岡県磐田市大中瀬 320 番地 竜洋昆虫自然観察公園

\*\* 〒419-0106 静岡県函南町平井南箱根ダイヤランド 13-880

\*\*\* 〒169-0073 東京都新宿区百人町 3-23-1 国立科学博物館動物研究部

筆者の一人、原木は静岡市周辺にて甲虫類の採集調査を行っており、現在までかなりの数のアリヅカムシを採集した。また、田添も自宅（田方郡函南町）の周辺や県内東部で採集を行っており、いくつかのアリヅカムシを採集した。今回これらの標本を野村が同定し、以下のような結果を得ることができたので報告しておきたい。なお、近隣の山梨、神奈川両県の採集品が若干混じっているが参考資料として併せて報告したい（静岡県からの記録は〈採集データ〉、その他の2県は〈他県データ〉として示した）。

本稿は1998年ごろまとめられ、一度投稿されたが、出版されないうちに内容が古くなってしまったため、野村が参考標本を再度同定して、今回発表するものである。野村らがすでに発表した多数の論文について、一部静岡県産標本が含まれている可能性はあるが、十分に参照していないことをお断りしておきたい。

採集地名は、一部市町村合併以前の旧地名で示されている。2007年11月現在、これらは以下のように変更になっている：(旧)静岡市、清水市→(新)静岡市；天竜市、浜北市→(新)浜松市；賀茂郡賀茂村→西伊豆町；田方郡伊豆長岡町、韮山町、大仁町→伊豆の国市；田方郡修善寺町、土肥町、天城湯ヶ島町、中伊豆町→伊豆市；田方郡戸田村→沼津市；庵原郡蒲原町→(新)静岡市；榛原郡御前崎町、小笠郡浜岡町→御前崎市；榛原郡相良町、榛原町→牧の原市；(旧)島田市、榛原郡金谷町→(新)島田市；榛原郡中川根町、本川根町→川根本町；(旧)浜松市、周智郡春野町、浜名郡可美村、舞阪町、雄踏町、引佐郡細江町、引佐町、三ヶ日町、磐田郡龍山村、佐久間町、水窪町→(新)浜松市；(旧)掛川市、小笠郡大須賀町、大東町→(新)掛川市；小笠郡小笠町、菊川町→菊川市；(旧)袋井市、磐田郡浅羽町→(新)袋井市；(旧)磐田市、磐田郡福田町、竜洋町、豊田町、豊岡村→(新)磐田市。

以上の変更の中で最も注目すべきは浜松市である。2005年7月1日、同市は、すでに合併方針を明らかにしていた周辺の4郡11町村と合併し、新浜松市としてスタートした。2007年4月1日には全国で16番目、静岡県内で2番目の政令指定都市となった。人口は80万人を超え、現在では県下最大の都市となっている。

以下のリストにおいて、未記載種であると判断されたものは属名+sp.の後に数字を付けることで示した。♀個体のみのため種が特定できなかったものについては、種番号の代わりに※印で示し、sp.の後に数字を付さず示した。それぞれの種についてのコメントはすべて野村が付した。\*印をつけたものは今回初めて静岡県から正式に記録されると考えられる種である（ただし学名の確定している種のみ）。

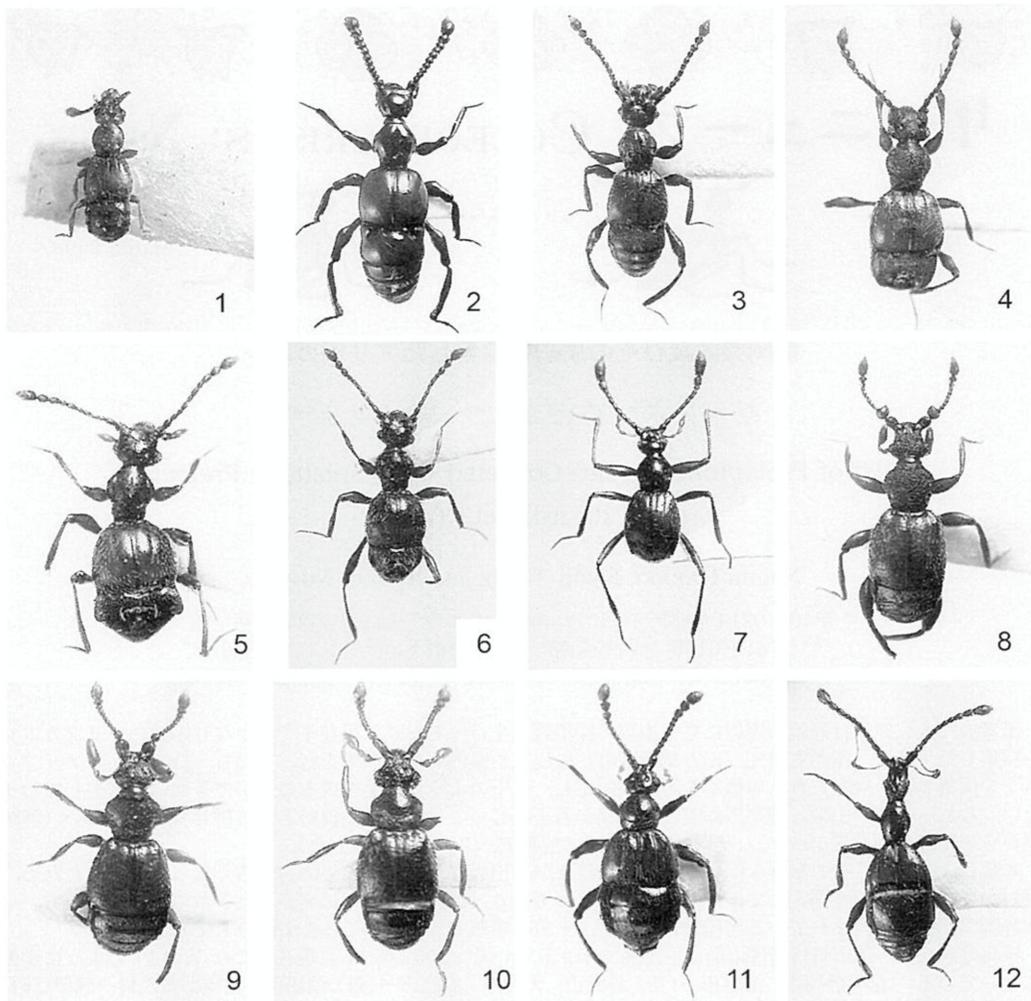


図1-12. — 1. *Biblopectus?* sp. 1♂, 2. *Batristilbus politus* (SHARP) エグリチイロアリヅカムシ♂, 3. *Petaloscapus basicornis* (SHARP) ヒゲブトムネトゲアリヅカムシ♂, 4. *Batriscaenaulax modestus* (SHARP) ハケスネアリヅカムシ♂, 5. *Arthromelodes dilatatus shiranemontanus* NOMURA ♀, 6. *Arthromelodes sinuatipes* NOMURA ♀, 7. *Triomicrus sublaevis* RAFFRAY スベマルムネアリヅカムシ♂, 8. *Bryaxis sauteri* RAFFRAY ザウターオノヒゲアリヅカムシ♂, 9. *Bryaxis mayumi* LÖBL et al. マユミオノヒゲアリヅカムシ♂, 10. *Tychobythinus aino* KURBATOV アイノオノヒゲアリヅカムシ♂, 11. *Tyrus* sp. 1♀, 12. *Pselaphogenius orientalis* BESUCHET カギヒゲナガアリヅカムシ♂.

STAPHYLINIDAE ハネカクシ科

PSELAPHINAE アリヅカムシ亜科

Bythinoptectitae シュモクアリヅカムシ上族

1. *Parapyxidicerus carinatus* K. SAWADA シュモクアリヅカムシ

本種は頭部前面に大きな凹陷のある顕著な種で、本州、四国、九州に広く分布する。常緑樹林の落葉土中から得られるが、個体数はあまり多くない。

〈採集データ〉1♀, 静岡市大谷, 1. xi. 1982, 原木。

Euplectitae ナガアリヅカムシ上族

2. *Biblopectus?* sp. 1 (図1)

細長いハネカクシ型の体形をした小型種である。現在の分類では Trichonychini 族 Panaphantina 亜族に分類される。この亜族には従来の Bibloplectina 亜族および Acetaliina 亜族 (いずれも Euplectini 族) が含まれる。この群は *Acetalius*, *Philoscotus* の両属を除いて、種の分類は進んでいないが、土壌中に普通に見出される。

〈採集データ〉 1♂, 焼津市坂本, 25. x. 1982, 原木。

3. *Aphilia longicollis* (JEANNEL) ホソヒメアリヅカムシ\*

アリヅカムシの中でもとりわけ小さな種類 (約 0.9 mm) であり、海岸に近い広葉樹林の落葉中からよく発見される。

〈採集データ〉 1♂, 静岡市大谷, 1. xi. 1982, 原木。

4. *Euplectus* sp. 1

〈採集データ〉 1♀, 焼津市, 3. v. 1985, 原木。

Batrisitae ムネトゲアリヅカムシ上族

5. *Batrisodes (Excavodes) dorsalis* JEANNEL タカオトゲアリヅカムシ\*

東京高尾山を基準産地として記載された種で、頭胸部が粗く密に点刻されることで他と容易に区別できる。東北～中部地方に分布する。

〈採集データ〉 1♂1♀, 伊豆天城峠, 17. x. 1982, 原木; 2♂, 静岡市安倍峠, 29. v. 1989, 原木; 1♂+1 ex., 榛原郡本川根町又峡, 7. x. 1990, 田添。

6. *Batrisodes (Excavodes) rugicollis* (SHARP) ハコネトゲアリヅカムシ\*

本種は、同属で日光中禅寺から記載された *B. ornatifrons*、群馬県熊の平から記載された *B. acutifrons* と同じ種群に属するもので、箱根宮ノ下および相州大山から記載され、本州の太平洋岸に広く分布する。

〈採集データ〉 1♂, 志太郡岡部町宇津ノ谷, 27. ix. 1982, 原木。

※*Batrisodes (Excavodes)* sp.

〈採集データ〉 1♀, 志太郡岡部町宇津ノ谷, 27. ix. 1982, 原木; 1♀, 伊豆天城峠, 17. x. 1982, 原木。

7. *Batrisodellus* sp. 1

〈採集データ〉 1♂, 静岡市安倍峠, 29. v. 1989, 原木; 1♂1♀, 榛原郡本川根町梅地, 4. v. 1982, Y. TAHIRA 採集。

8. *Kigatrodes gracilis* (SHARP)\*

SHARP はジョージ=ルイスが箱根で採集した 2 種のムネトゲアリヅカムシを記載し、JEANNEL はそれらのために、タイプ産地の木質温泉にちなんで *Kigatrodes* という属を新設した。*Kigatrodes* 属は、*Batrisodellus* 属に近いが、雄の触角第 1 節が長く太い円筒状であること、雄の後脚けい節内面先端付近に毛斑をもつことで区別される。しかし、これらの区別点は属を分けるほどの特徴ではなく、将来的には同属とみなして差し支えないと思われる。

〈採集データ〉 1♂, 静岡市大谷, 4. x. 1982, 原木。

9. *Batristilbus politus* (SHARP) エグリチイロアリヅカムシ\* (図 2)

大形のアリヅカムシで、濃い赤色と体表の強い光沢が特徴である。倒木に営巣したハヤシケアリなどの巣に侵入する好蟻性の種として知られるが、土壌中から単独で採集されることも多い。

〈採集データ〉 1♂, 静岡市大谷崩, 13. v. 1985, 原木; 1♂, 焼津市坂本, 13. ix. 1982, 原木; 1♀, 同, 19. ix. 1982, 原木。

10. *Petaloscapus basicornis* (SHARP) ヒゲブトムネトゲアリヅカムシ (図 3)\*

やや大形のムネトゲアリヅカムシで、落葉中に普通に産する。本属の種は外見での区別が困難で、雄交尾器の内部骨片の形状によって識別することができる。西日本では同一地点から複数の種が発見されることが少なくなく、この場合、♀ 個体は通常全く同定できない。

本種は従来、次種と混同されていた。なぜなら、JEANNEL (1958) が本種の再記載に使った標本が真の本種ではなく、次種だったからである (JEANNEL の誤同定ではないようだ)。この経緯については別に詳しく書きたい。本種は東京 (奥多摩)、神奈川 (湘南、相州大山、箱根)、山梨 (富士山) などに産し、個体数は多い。

〈採集データ〉1♂, 伊豆天城峠, 17. x. 1982, 原木; 1♂, 田方郡韭山町韭山城跡, 6. ii. 1991, 田添.  
 〈他県データ〉1♂, 神奈川県箱根上湯, 26. v. 1991, 田添.

#### 11. *Petaloscopus* sp. 1

本種は従来, 前種と混同されていたが, ♂が前頭部中央に竜骨状の隆線を持つことで他から容易に区別できる. 中部, 関東地方に広く分布する. 平野 (2004) が「ニセヒゲブトムネトゲ (仮称)」として扱ったのは本種である.

〈採集データ〉1♂, 焼津市内, 19. viii. 1982, 原木; 1♂, 静岡市大谷 (静岡大構内), 17. iii. 1991, 田添.

#### 12. *Petaloscopus* sp. 2 (8E)

本種と次種の種名の後に ( ) で示された記号は, 後で種を照合するための符牒であるので, 本論には関係がない.

〈採集データ〉2♂, 焼津市坂本, 19. ix. 1982, 原木; 1♂, 志太郡岡部町宇津ノ谷, 27. ix. 1982, 原木.

#### 13. *Petaloscopus* sp. 3 (9E=7E)

本種は他に富士山 (山梨県側) から発見されている.

〈採集データ〉1♂, 静岡市ウド山, 1. ix. 1982, 原木; 1♂, 焼津市坂本, 19. ix. 1982, 原木; 1♂, 志太郡岡部町宇津ノ谷, 27. ix. 1982, 原木.

#### ※*Petaloscopus* sp.

〈採集データ〉1♀, 伊豆天城峠, 17. x. 1982, 原木; 2♀, 田方郡韭山町韭山城跡, 6. ii. 1991, 田添; 1♀, 焼津市大覚寺, 16. ix. 1982, 原木; 2♀, 同坂本, 19. ix. 1982, 原木; 1♀, 榛原郡本川根町寸又峽, 7. x. 1990, 田添.

#### 14. *Batrissoplissus galloisi* JEANNEL ガロアフサヒゲアリヅカムシ

従来「ガロアトゲアリヅカムシ」と呼ばれていたが, トゲ状の突起はもっていないので, 上のように改称された. 関東地方の平地に多く見られ, 灯火にも集まる. 大きな河川に沿って発見されている.

〈採集データ〉1♂, 島田市天徳寺, 20. ix. 1982, 原木.

#### 15. *Batriscenellus* (*Batriscenellus*) sp. 1

〈採集データ〉1♂, 静岡市大谷崩, 13. v. 1985, 原木.

#### 16. *Batriscenellus* (*Scaioscenellus*) *similis* (SHARP) アナバラアリヅカムシ

横浜から記載されたが, 新潟, 栃木, 埼玉, 東京, 神奈川, 山梨の各都県から記録されている. 関東~中部地方に普通に産し, 産地での個体数は多い.

〈採集データ〉1♂, 静岡市大谷, 4. x. 1982, 原木.

#### 17. *Batriscenellus* (*Batriscenellinus*) *uenoi* NOMURA ウエノツヤアリヅカムシ

本種は♂の後脚腿節前半部が強く膨らみ, 靴べら状の短い剛毛を多数備えることで, 非常に顕著な中形のアリヅカムシである. 東北地方から九州まで広く分布し, 川原の石の下や, 溶岩台地の草の根際など, 砂礫の多い乾いた環境を好む.

〈採集データ〉1♂, 静岡市大谷崩, 13. v. 1985, 原木; 1♂, 榛原郡中川根町山犬段, 18. viii. 1990, 原木.

#### 18. *Batriscenaulax modestus* (SHARP) ハケスネアリヅカムシ (図 4)

本種は同属のナガスネアリヅカムシ (*B. longipes* JEANNEL) に外見上酷似するが, 雄の前脚けい節先端三分の一ほどの部分が強く膨らみ, そこに毛束をそなえることで, けい節先端付近が膨らむナガスネと区別できる. 雌同士での区別はきわめて難しい. 東京目黒から記載された *B. furuhatai* (KUBOTA) は異名.

〈採集データ〉1♂, 伊豆天城峠, 17. x. 1982, 原木; 1♂, 榛原郡本川根町寸又峽, 7. x. 1990, 田添.

#### ※*Batriscenaulax* sp.

〈採集データ〉2♀, 伊豆天城峠, 17. x. 1982, 原木; 2♀, 焼津市坂本, 19. ix. 1982, 原木.

#### 19. *Arthromelodes pilicollis* NOMURA

NOMURA (1991) によって周智郡森町葛布の滝から記載された種で, 本記録が第 2 番目の産地となる.

〈採集データ〉2♂, 榛原郡本川根町寸又峽, 7. x. 1990, 田添.

20. *Arthromelodes dilatatus shiranemontanus* NOMURA (図5)

本種は「日本」(詳しい産地は不明)から記載され、NOMURA (1991)によって関東山地のものが *daibosatsuanus*、富士山のもものが *fujimontanus*、南アルプスのもものが本亜種と、4亜種に分類されている。  
 〈採集データ〉2♂, 静岡市安倍峠, 29. v. 1989, 原木。

21. *Arthromelodes sinuatifipes* NOMURA (図6)

丹沢ユースンから記載された種で、富士山などでも採集されているが、少ない種である。地域的に雄交尾器にかなりの変異が見られるようである。  
 〈採集データ〉2♂, 静岡市安倍峠, 29. v. 1989, 原木。

※*Arthromelodes?* sp.

〈採集データ〉1♀, 伊豆天城峠, 17. x. 1982, 原木; 1♀, 静岡市安倍峠, 29. v. 1989, 原木。

22. *Batrisceniola dissimilis* (SHARP) アナズアリヅカムシ

本州全域のブナ帯に最も普通の種であり、個体数も極めて多い。落葉土中やコケの中など、さまざまな環境に棲息する。静岡県からは遠州小笠山(大東町)からすでに記録されている(NOMURA, 1991)。  
 〈採集データ〉2♂, 藤枝市高根山, 22. xi. 1982, 原木; 2♂1♀, 静岡市安倍峠, 29. v. 1989, 原木。

Goniaceritae オノヒゲアリヅカムシ上族

23. *Triomicrus sublaevis* RAFFRAY スベマルムネアリヅカムシ (図7)

次種に似るが、やや標高の高い地域に産する。  
 〈採集データ〉2♂, 伊豆天城峠, 17. x. 1982, 原木。

24. *Triomicrus protervus* (SHARP) マルムネアリヅカムシ

平地から低山地に極めて普通のアリヅカムシで、本県では三島市山中新田、御殿場市富士山太郎坊、大東町小笠山(いずれも野村採集による: LÖBL et al., 1998a)などから記録されている。  
 〈採集データ〉2♂1♀, 田方郡函南町ダイヤランド, 29. x. 1991, 田添; 1♂3♀, 同, 20. i. 1991, 田添; 2♀, 同, 1. ii. 1991, 田添; 1♀, 焼津市坂本, 19. ix. 1982, 原木; 1♂, 榛原郡中川根町山犬段, 18. viii. 1990, 原木; 1♀, 磐田市桶ヶ谷沼, 1. iii. 1991, 田添。  
 〈他県データ〉1♂, 山梨県明野村, 16. vii. 1989, 原木。

25. *Morana discedens* SHARP マメアリヅカムシ

西日本では普通だが、中部~関東地方ではそれほど多くない。  
 〈採集データ〉1♂, 島田市天徳寺, 20. ix. 1982, 原木。

26. *Morana elegans* TANOKUCHI トウカイマメアリヅカムシ

千葉県以西の太平洋側に偏って分布する。  
 〈採集データ〉1♂, 田方郡函南町冷川, 27. iv. 1992, 田添。

27. *Takaorites torticornis* JEANNEL ネジレヒゲアリヅカムシ

本種は東京高尾山をタイプ産地とするもので、東北から関東、中部地方に分布する。本属は多くの近似種群を含んでいるが、分類は進んでいない。  
 〈採集データ〉1♂, 伊豆天城峠, 17. x. 1982, 原木。

※*Takaorites* sp.

〈採集データ〉1♀, 伊豆天城峠, 17. x. 1982, 原木。

28. *Atenisodus* sp. 1

本属は日本から正式の記録がないが、関東から九州、琉球にかけて1種?が分布している。  
 〈採集データ〉1♀, 焼津市坂本, 30. viii. 1982, 原木; 1♂, 同, 25. x. 1982, 原木。

29. *Trissemus alienus* (SHARP) ナミエンマアリヅカムシ

大形の顕著な種で、河川上~下流域の川原や、海岸に棲息し、個体数は多い。よく灯火に飛来する。  
 〈採集データ〉1♂, 焼津市浜当目, 13. xii. 1982, 原木。

※*Rybaxis* sp.

〈他県データ〉1♀, 山梨県明野村, 16. vii. 1989, 原木.

30. *Bryaxis sauteri* RAFFRAY ザウターオノヒゲアリヅカムシ (図 8)

本属は恐らく日本で最も多くの種を含むアリヅカムシの属であるが, LÖBL et al. (1998b) によって日本産の 21 新種が記載され, 34 種となった. 本種は三島市山中新田で H. SAUTER によって採集された標本を元に記載され, 頭胸部が粗く密に点刻され, ♂の触角第 2 節上面が円錐型に尖ることで容易に他と区別することができる.

〈採集データ〉1♀, 藤枝市高根山, 22. xi. 1982, 原木; 2♂1♀, 志太郡岡部町宇津ノ谷, 27. ix. 1982, 原木.

31. *Bryaxis mayumi* LÖBL et al. マユミオノヒゲアリヅカムシ (図 9) \*

群馬県碓氷峠から記載された種.

〈採集データ〉1♂1♀, 伊豆天城峠, 17. x. 1982, 原木.

32. *Bryaxis sparsepunctatus* JEANNEL コブオノヒゲアリヅカムシ \*

高知県日下で, 高名な洞窟昆虫学者 H. COIFFAIT 博士によって採集された標本を元に記載された種.  
〈採集データ〉2♂, 焼津市坂本, 13. ix. 1982, 原木.

33. *Bryaxis jomon* LÖBL et al. ジョウモンオノヒゲアリヅカムシ \*

〈採集データ〉2♂, 伊豆天城峠, 17. x. 1982, 原木.

34. *Bryaxis kofun* LÖBL et al. コフンオノヒゲアリヅカムシ \*

千葉県清澄山から記載された種で, 中部から東北地方にかけて多い.  
〈採集データ〉1♂, 伊豆天城峠, 17. x. 1982, 原木.

35. *Bryaxis* sp. 1

〈採集データ〉1♂, 藤枝市高根山, 22. xi. 1982, 原木.

36. *Bryaxis* sp. 2

群馬県嬭恋から記載された *B. kamakura* LÖBL et al. カマクラオノヒゲに近似の未記載種である.  
〈採集データ〉1♂, 静岡市大谷, 4. x. 1982, 原木.

※*Bryaxis* sp.

〈採集データ〉1♀, 伊豆天城峠, 17. x. 1982, 原木; 1♀, 静岡市大谷, 4. x. 1982, 原木; 1♀, 焼津市坂本, 30. viii. 1982, 原木; 1♀, 同, 13. ix. 1982, 原木; 1♀, 志太郡岡部町宇津ノ谷峠, 27. ix. 1982, 原木.

37. *Tychobythinus aino* KURBATOV アイノオニオノヒゲアリヅカムシ (図 10) \*

千島列島国後島から記載された種で, NOMURA (1996) が茨城県那珂湊市から記録した.  
〈採集データ〉1♂, 静岡市大谷, 1. xi. 1982, 原木.

38. *Tainochus insulicola* (NOMURA et LEE) シマムクゲアリヅカムシ \*

韓国済州島から記載された種で, 日本では本州全域に広く分布する.  
〈採集データ〉1♀, 静岡市大谷, 4. x. 1982, 原木; 1♂, 焼津市坂本, 13. ix. 1982, 原木; 1♂, 同, 19. ix. 1982, 原木.

39. *Tychus dichotomus* NOMURA et LEE タイリクモリアリヅカムシ \*

上と同時に済州島から記載され, 日本では本州, 九州に分布する. 沿岸の広葉樹を交えたクロマツ林などに見られる.  
〈採集データ〉1♂, 田方郡函南町ダイヤランド, 21. iv. 1997, 田添; 1ex., 同町冷川, 27. iv. 1992, 田添.

## Pselaphinae ヒゲナガアリヅカムシ上族

40. *Lasinus* sp. 1

本属は前, 中脚に大きなトゲを備えた大形のアリヅカムシである. 本種は従来, *L. spinosus* SHARP オオトゲアリヅカムシと混同されていたが, 後者は長崎原産で, 九州本土のみに分布することがわかってきた. 雄の触

角第9節に顕著な違いが現れる。次種と混棲することもある。

〈採集データ〉1♀, 焼津市坂本, 30. viii. 1982, 原木; 1♂1♀, 同, 19. ix. 1982, 原木; 1ex., 磐田市鶴ヶ池, 2. iii. 1991, 田添。

〈他県データ〉1♀, 山梨県明野村, 16. vii. 1989, 原木。

41. *Lasinus monticola* K. SAWADA ヤマオトゲアリヅカムシ

〈採集データ〉1♂2♀, 藤枝市蔵田, 22. xi. 1982, 原木。

42. *Labomimus* sp. 1

アシナガアリヅカムシ (*L. reitteri* SHARP) に似るがやや小型の明らかな未記載種。他に愛知, 三重から採集されている。

〈採集データ〉2♂2♀, 藤枝市蔵田, 22. xi. 1982, 原木。

43. *Tyrus* sp. 1 (図 11)

〈採集データ〉1♀, 田方郡函南町ダイヤランド, 29. iv. 1992, 田添; 1♀, 同, 13. iv. 1997, 田添; 1♀, 同, 27. iv. 1997, 田添。

44. *Pselaphogenius orientalis* BESUCHET カギヒゲナガアリヅカムシ (図 12)

三島市山中新田で H. SAUTER が採集した標本を元に記載された。TANOKUCHI (1981) が記載した *P. uncifer* は異名。東北南部(福島県)から、北関東、筑波山まで多く見られ、関東平野および房総半島には分布せず、離れて関東山地、箱根、伊豆半島などに分布する。雄交尾器の内部骨片 (endophallus) の形状には細かな地域変異が認められる (NOMURA, 2001)。*P. tridentatus tridentatus* K. SAWADA タカネヒゲナガとは分布域が重複するが、本種のほうがより低所に生息し、混棲することはまれである。静岡県からは下記の記録を含め、本種は5箇所、タカネは3箇所からすでに記録されている (NOMURA, 2001)。

〈採集データ〉1♂, 伊豆天城峠, 17. x. 1982, 原木。

※*Pselaphogenius* sp.

〈採集データ〉1♀, 藤枝市高根山, 22. xi. 1982, 原木。

45. *Pselaphus* sp. 1

〈採集データ〉1♂, 伊豆天城峠, 17. x. 1982, 原木。

46. *Paracyathiger fujiyamai* (KUBOTA) フジヤマダルマアリヅカムシ\*

神奈川県真鶴から記載され、本州、四国、韓国から知られていたが、中国北京、奄美大島、石垣島まで分布することが知られるようになった (NOMURA, 1999)。低地の照葉樹林に産し、産地での個体数は多いが局地的。

〈採集データ〉1♀, 榛原郡本川根町長島, 8. xi. 1982, 原木。

Clavigerinae ヒゲトアリヅカムシ上族

47a. *Diartiger fossulatus ispartae* (KARAMAN) コヤマトヒゲトアリヅカムシ中部近畿亜種

NOMURA (1997) は古くから知られるコヤマトヒゲトアリヅカムシと近似の数種を1種7亜種にまとめた。北海道から関東甲信越にかけて原名亜種(次亜種)が分布し、近畿から中部地方にかけて本亜種が分布するが、フォッサマグナ地域、特にタイプ産地である箱根では、この両亜種の典型的な個体とさまざまな段階の中間的な個体が同一地点で出現し、亜種を決定することが難しい。

以下の記録はいずれもフォッサマグナ地域に含まれるが、唯一の♂個体(函南町産)は中部近畿亜種の特徴を備えるため、本亜種と同定した。

〈採集データ〉1♂4♀, 田方郡函南町冷川, 26. iv. 1991, 田添; 1♀, 同 葦山町葦山城趾, 6. ii. 1991, 田添。

47b. *Diartiger fossulatus fossulatus* SHARP コヤマトヒゲトアリヅカムシ原名亜種

NOMURA (1997) によると、本亜種はフォッサマグナの東側に見られ、分布の北限は北海道南部に達する。静岡県からは未記録となる。

〈他県データ〉1♀, 山梨県明野村, 16. vii. 1989, 原木。

参考文献

LÖBL, I., S. A. KURBATOV & S. NOMURA, 1998a. A revision of the genus *Triomicrus* SHARP (Coleoptera, Staphylinidae,

- Pselaphinae). *Bull. Natn. Sci. Mus., Tokyo*, ser. A, 24: 69-105.
- LÖBL, I., S. A. KURBATOV & S. NOMURA, 1998b. On the Japanese species of *Bryaxis* (Coleoptera: Staphylinidae: Pselaphinae), with notes on allied genera and on endoskeletal polymorphy. *Species Diversity, Sapporo*, 3: 219-269.
- NOMURA, S., 1991. Systematic study on the genus *Batrisoplilus* and its allied genera from Japan (Coleoptera, Pselaphidae). *Esakia, Fukuoka*, (30): 1-462.
- NOMURA, S., 1996. Pselaphid fauna (Coleoptera, Pselaphidae) of the Abukuma Hills, Eastern Honshu, Japan. *Mem. natn. Sci. Mus., Tokyo*, (29): 113-124.
- NOMURA, S., 1997. A systematic revision of the Clavigerine genus *Diartiger* SHARP from East Asia (Coleoptera, Staphylinidae, Pselaphidae). *Esakia, Fukuoka*, (37): 77-110.
- NOMURA, S., 1999. Notes on the distribution of *Paracyathiger fujiyamai* (KUBOTA) (Coleoptera, Staphylinidae, Pselaphinae). *Elytra, Tokyo*, 27: 111-112.
- NOMURA, S., 2001. A taxonomic revision of the Japanese species of the genus *Pselaphogenius* (Coleoptera, Staphylinidae, Pselaphinae) Part 3, species from Central Honshu. *Bull. natn. Sci. Mus., Tokyo*, (37): 279-291.
- TANOKUCHI, Y., 1981. A new species of the genus *Pselaphogenius* (Coleoptera, Pselaphidae) from Japan. *Kontyû, Tokyo*, 49: 351-354.

## ○屋久島産ヒゲナガゾウムシ 3種の記録

手元に普通種であるが、屋久島未記録のヒゲナガゾウムシ 3種があるので報告する。

## 1. イボタロウヒゲナガゾウムシ

*Anthrribus niveovariegatus* (ROELOFS)

1 ex., 鹿児島県熊毛郡屋久町中間, 20. IV. 2004, 田中 稔採集.

## 2. クロシメナガヒゲナガゾウムシ

*Phaulimia aberrans* (SHARP)

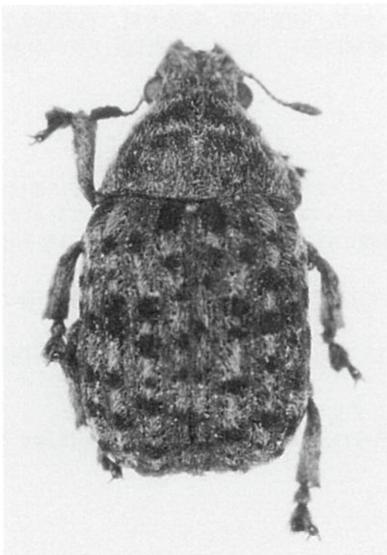
1 ex., 鹿児島県熊毛郡屋久町原, 17. V. 2003, 向山敬延採集.

## 3. アカシメナガヒゲナガゾウムシ

*Phaulimia rufobasis* MORIMOTO

1 ex., 鹿児島県熊毛郡屋久町栗生, 12. VIII. 2003, 向山敬延採集.

報告にあたり同定をしていただいた的場 續氏に改めてお礼を申し上げる。



屋久島産イボタロウヒゲナガゾウムシ

## 引用文献

- 森本 桂, 1984. ヒゲナガゾウムシ科. 原色日本甲虫図鑑 (IV) pp. 229-248, 保育社, 大阪.  
(兵庫県西宮市, 田中 稔)

## ○キヌゲマルトゲムシの本州からの追加記録

キヌゲマルトゲムシ *Cytilus sericeus* (FORSTER, 1771) は、全北区に広く分布し、日本では北海道からのみ記録されてきた種である。しかし、PÜTZ (2004) および佐藤 (2007) により秋田県から記録され、本州にも分布することが確認された。

筆者は、下記のとおり栃木県で本種を採集しているため本州からの追加記録として報告する。

1 頭, 栃木県日光市明神ヶ岳南西 1.9 km (標高 1,030 m) (N36°55.08', E139°35.08'), 12. VI. 2007, 蓑島悠介採集・標本保管.

山道に面した砂防ダム付近で、日当たりの良い乾いた礫を歩いている個体を採集した。砂防ダムからは水が流れていたが、採集した場所は流れからやや離れており、礫上は乾燥していた。現在のところ、日本における本種の分布南限となる。

本種のような比較的大型で顕著な種が、近年になるまで本州から記録されてこなかったことは意外であり、興味深い。なお、幼虫期については、BÖVING & CRAIGHEAD (1931) などにも図示されている。

末筆ながら、文献類についてご教示頂いた、ホシザキグリーン財団の林成多氏にお礼申し上げます。

## 引用文献

- BÖVING, A. G. & F. C. CRAIGHEAD, 1931. An illustrated synopsis of the principal larval forms of the order Coleoptera. 351 pp., Brooklyn Ent. Soc.
- PÜTZ, A., 2004. Zur Kenntnis der Phyllenkafer Japans. V. Eine neue *Curimopsis*-Art und weitere neue Nachweise (Col. Byrrhidae). *Ent. Nach. Ber.*, 48: 173-174.
- 佐藤福男, 2007. 秋田市雄和農業試験場内で得られた興味ある甲虫. *秋田自然史研究*, (52): 22-23.

(東京農業大学, 蓑島悠介)  
(株)環境指標生物, 吉富博之)

## 追悼 穂積俊文さん

大澤 省 三

アマチュア甲虫界の大御所、穂積俊文さんが亡くなった。長年にわたって多数の甲虫愛好家を育ててこられた功績はまことに大きく、支柱を失った悲しみは深い。穂積さんと私の付き合いは70年も前にさかのぼり、思い出はつきない。その一部は「穂積俊文博士記念論文集」や「ねじればね」にも書いたが、それらとなるべく重複しない思い出を書いてみたい。

終戦直前の1943~1945年にかけて、穂積さんと私は、当時故服部広吉氏が主催する愛知の昆虫同好会の機関誌を共同で編集していた。三井物産の社員であった服部氏がビルマ、ラングーン支社へ出向され、同好会の運営を依頼されたためである。穂積さんが愛知一中3~5年で(図1)、私は同じ中学の2年後輩であった。機関誌の編集にあたっては、先輩の穂積さんが大幅に音頭をとられ、私はもっぱら下級生として雑用に専心させられた。あの当時は、上級生=神様であった。その間の失敗談?を一つ。図2に示した機関誌の中に「あまのさえずり」という文章があり、署名は「空々居士・漢々居士」としてある。この記事は、穂積さんが、中学の国語の副読本にある習いたての古典から、あちこちの美辞麗句を借用してつくりあげ、私が言われるまま、速記してできあがったものである。一口にいえば、「美麗種を目の色をかえて集めることなどしないで、自然の中で昆虫採集をしよう」という、ごくたわいもない内容であった。ところが、同好会員の一人から「あんな文章をのせるのはけしからん」というお叱りが私宛にきた。私はただ先輩の言われるまま筆記しただけなのに、えらい(しかし、懐かしい)災難にあったものである。なお、図2の写真の下は穂積さんの“有名”な直筆で、一目で同定可能である。

中学時代、穂積さんは庭球部に属し、マネージャーとして部員の面倒を見ておられた。テニスの技術のほうはお世辞にもすぐれたものとは言いがたかったが、部員をまとめ、面倒をよく見られたことは誰にも異存のな

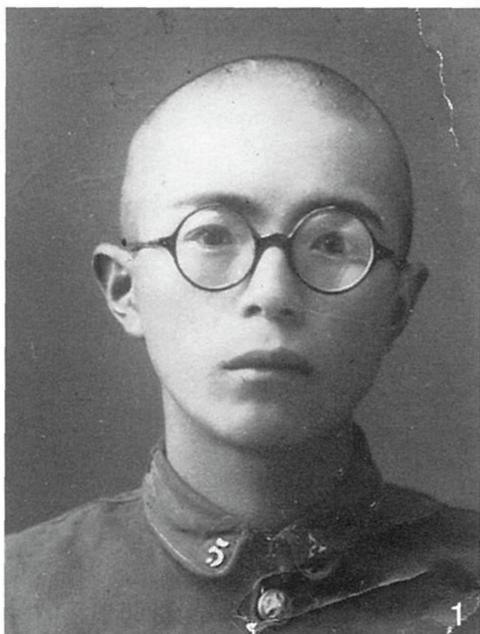
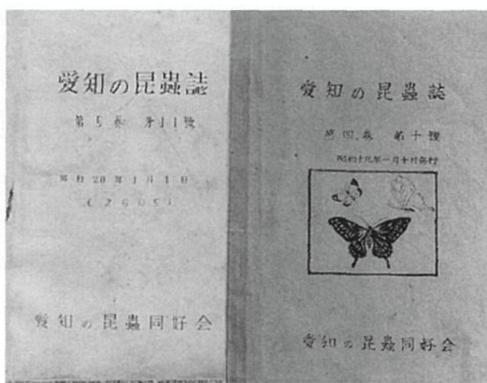


図1. 愛知一中5年生時代の穂積さん(1944年3月)。



昆虫少年時代の  
かり版同好会誌

2

図2. 穂積さんと一緒に編集した「愛知の昆虫雑誌」。左の表紙の2005とは1945年(終戦の年)のことで、皇紀2005年のこと。当時は西暦を使うとにらまれたものである。

図3. 日本鞘翅学会名古屋支部例会(1996年3月9日)の懇親会にて。左、穂積さん、右、筆者。



3

いところであった。穂積さんの温厚で優しい人柄と、組織をまとめる非凡の才能のあらわれというべきであろう。後に、名古屋昆虫同好会会長、日本鞘翅(目)学会・名古屋支部長を長年にわたって務められ、すべてに人から愛され、慕われたのも、むべなるかなである。(図 3)

晩年は、本職の医者をやめ、長年にわたって集められた標本も豊橋の自然史博物館に寄贈され、身辺の整理を終えて亡くなられた。見事という外ない。

(広島市)

## 穂積俊文先生を偲んで

大 平 仁 夫

最近の名古屋周辺の虫屋は厄難年続きである。2006年に佐藤正孝さん、2007年には森部一雄さん、田中蕃さん、それに穂積俊文先生を失い、周辺の大木が次々と薙ぎ倒されたようである。中でも穂積先生は、戦後のこの地域の在野の同好者を育ててこられた老木である。先生の人柄や行績などは「東海甲虫誌」(2001)に詳しくまとめられている。

穂積先生が残された仕事は多いが、代表的なのは地域の甲虫相の解明にあり、名古屋昆虫同好会の佳香蝶に「東海甲虫誌」と題して昭和 30 (1955) 年から昭和 61 (1986) 年までに 28 報を、その後は「愛知の昆虫, 上」の甲虫類の追加種を 12 報 (2003) まで報告され、その時点で 2872 種になるとされている。これをモデルに各県でも愛知県のこの種の数を超える目録作りが一つの目標にされた。また「愛知の昆虫, 上・下」(1990~1991) は、愛知県分布調査会の会長として、在野の多くの同好者を結集してまとめられた仕事である。予算面で索引ができなかったため、自弁で(上)の索引を作成されている。また、全国の同好紙を蒐集して、ラミーカミキリ、ミツノエンマコガネ、ミカワオサムシ、カミキリムシなどの幾つかの報告も出されている。その他、名古屋昆虫同好会の会長だけでなく、1975 年からは日本鞘翅学会の名古屋支部長の役職もされている。

穂積先生には独特の標本作りがあり、我々は「穂積スタイル」と呼んでいが、あの形をした標本は長い間のなぞであったが、その秘密は大平・浅岡 (2001) が紹介している。しかし、先生の標本の価値の高さは長谷川 (2001) が述べているように、地域のごく普通種まで丹念に集められていて、同定ラベルに同定者や採集場所(花とか新芽とか)まで、実によく記録されていることである。先生の甲虫類の標本は豊橋市自然史博物館に寄贈され、コメツキムシ類は大平が保管している。

いま振り返ってみると、先生の行績をまとめた記念集の「東海甲虫誌」(2001) が先生の生前に出版できたことは、長年の労にお報いするためにも本当によかったと思う。世話人の努力の賜である。今後も、この地域の甲虫相の解明には重要な文献として、穂積先生の足跡とともに各方面で活用されると思われる。ここに先生から受けた数々の恩を謝し、地域の同行者とともに改めてご冥福をお祈りする次第である。享年 81 才。合掌。

### (本文関係の参考資料)

- 長谷川道明, 2001. 穂積先生のコレクション. 東海甲虫誌: 365-368.  
 穂積俊文 (編), 1990-1991. 愛知の昆虫 (上): 1-506, (下): 1-416. 愛知県自然保護課.  
 穂積俊文, 2003. 「愛知の昆虫・甲虫目」の追加記録 (12)-2001 年のまとめ. 佳香蝶, 55(213): 5-8.  
 大平仁夫・浅岡孝知, 2001. 穂積先生の不思議. 東海甲虫誌: 352-354.  
 佐藤正孝 (編), 2001. 東海甲虫誌 (穂積俊文博士記念論文集) (2001): 1-268. 穂積俊文博士記念論文発行事業会: 名古屋昆虫同好会.

(〒444-3511 岡崎市舞木町狐山 6-4)



いつもにこやかな穂積先生 (2003 年 5 月)

## 穂積俊文先生を偲んで

長谷川 道 明

東海地方のアマチュア甲虫界の大御所として、また我々のよきリーダーとしてご活躍されていた穂積俊文先生が平成 19 年 6 月 21 日にご逝去された。名古屋の虫屋の大家には医師が多いが、穂積先生もその一人で、名古屋大学医学部を卒業後は、トヨタ病院内科部長、小牧市民病院長などを経て昭和 50 年からは小牧市内科医院を開業されていた。

大正 15 年生まれの穂積先生は、既に東海地方の昆虫界では最長老となっており、体力の衰えなどを理由に自ら引退を宣言され、この数年は同好会などの地元の会合にもほとんど姿を見せられなかったことから、心のどこかで準備はできていたはずなのだが、いざ訃報に接すると、寂しさと悲しみを禁じえない。

穂積先生は、鞘翅学会の前進である鞘翅目学会が設立されると、いち早く名古屋に支部を立ち上げるなど、東海地方の甲虫界のリーダーとして、当地方の甲虫研究を盛り上げ、多くの後進を育てられた。

穂積先生が鞘翅学会の名古屋支部長を勤められていたころ、支部会は年に一度、愛知県産業貿易会館の会議室などを借りて行われ、そのたびに東京や大阪から図鑑などの著者に名を連ねる有名研究者を招聘して講演会を開いていた。こうした「有名人」は、地方にいと中々お目にかかる機会もないので、高校生だった私には大変な楽しみであった。

支部会では参加者から会場費として 200 円程度を徴収していたが（それも標本や文献などの閲覧物を持参した者は免除または減額で、高校生以下にも割引があったと記憶している）、招待講演の講師の旅費や謝礼、開催案内に使う郵送料など、足りない部分は私費を投じられての運営だった。

支部会設立の裏話をすると、名古屋で甲虫関係の会合を持ちたかったが、産業貿易会館など公共の会議室は個人名では借りられず、そのため鞘翅目学会に支部会の名を使わせてもらえるよう交渉したのが始まりだったと伺っている。案内も鞘翅学会の会員の如何を問わず、先生が知っている東海地方在住の甲虫屋にはすべてに郵送されていたご様子だった。

こうした面倒見のいい先生のご性格に直接、または間接的に世話になった虫屋は多く、私自身も、中学生の時に当時穂積先生が会長をされていた名古屋昆虫同好会に入会して以来、先生のリーダーシップによる恩恵を受けながら育ったと思っている。

そこでこれまでの感謝の気持ちを表す事業をと、1998 年に穂積先生が開業していた医院を閉められたのを契機に、亡くなられた佐藤正孝先生を中心に東海地方の昆虫関係者で立ち上げたのが「穂積俊文博士記念論文集発行事業会」である。事務局は私が担当させていただいた。この事業名、いったい何を記念するのか良くわからない、まるで競馬のレースのような名だが、これにはいささか言い訳がある。公職にある先生方に対しては、よく「〇〇先生退官記念論文集」などといった事業名がつけられるが、「穂積内科閉業記念」や「穂積先生引退記念」ではあまりにも失礼だし、医院は閉められても、医師を辞めたわけではないと公言されていたし、古希は過ぎてしまったし、喜寿までは待てないしと、結局いい案が浮かばないまま、とにかく事業を成功させることに意義があると、細かいことにこだわらない佐藤先生と、細かいことに気がまわらない私のコンビが災いし、仮名がそのまま事業名になってしまった。

ともあれ、穂積先生の昆虫関係の業績と、31 年間にわたって 28 報まで連載した先生の代表的な著作「東海甲虫誌」の全報の再録、それと寄稿による原著論文などを収めた記念論文集『東海甲虫誌』の発行というこの企画には全国から多くの賛同を得ることができた。記念誌が完成した 2001 年には、発行を記念して、先生ご夫妻をお迎えして盛大なパーティを開催することもできた。事務局の私の力不足からいろいろな不備はあったと思うが、少しでも謝恩の気持ちが伝えられたのではないかと、今私自身を慰めている。

なお、穂積先生が生前集められた約 2 万 5 千点のコレクションは、現在私が勤める豊橋市自然史博物館に寄贈され保管されている。穂積コレクションには、先生がこつこつと記録された東海地方の甲虫類の証拠標本がほぼ散逸せず揃っている。その中には現在の愛知県では絶滅し、穂積コレクション以外では見ることができない標本も少なくない。もし、穂積先生がいなかったら、こうした甲虫は、標本はおろか記録にとどめられることもなく、姿を消してしまっていたはずである。穂積先生の功績に改めて感謝し、ご冥福を心からお祈りしたい。

(豊橋市自然史博物館)

## 根室支庁中標津におけるエゾクシヒゲヒラタコメツキの記録

エゾクシヒゲヒラタコメツキ *Orithales serraticornis yezoensis* MIWA, 1934 は北海道の阿寒岳から採集された1雄個体に基づいて *O. yezoensis* として記載された種である。後に GURJEVA (1989) は本種を旧大陸に分布する *O. serraticornis* と同種と考えシノニムとして処理した。しかし大平(1993)は *O. serraticornis* とは形態に若干異なるところがあるとして、*O. yezoensis* を *O. serraticornis* の亜種に位置づけたので、現在は上記学名で扱われている。

本種の雄は種小名が示すように触角の第4節か

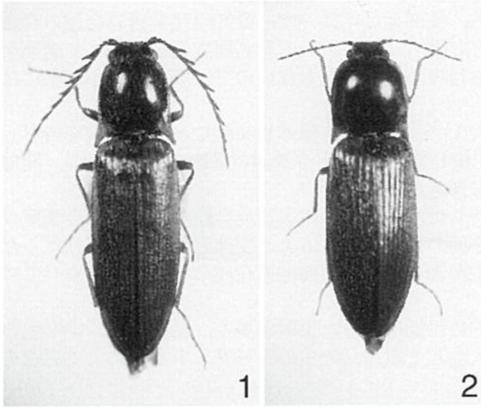


写真1-2. 1:♂; 2:♀.

ら櫛歯状を呈する。そのため、他種との区別は容易である。これまでの分布記録は、大雪山系、阿寒岳周辺、羅臼岳周辺などの高山帯に集中しており、個体数は非常に少ないようである。筆者は今回、豊嶋亮司氏を通じて根室支庁中標津町で採集された標本を検査する事ができたので、ここに記録しておく。

1♂1♀, 北海道根室支庁中標津町武佐, 13. V. 1976, 北嶋直之採集。

今回検した個体の体長は雄7mm, 雌8mm, 体色は雌雄ともに頭部, 前胸背板は黒色で光沢が強く, 前胸背板後角, 上翅, 肢は茶褐色であった。

貴重な標本を提供していただいた岩見沢市の北嶋直之氏, ならびに豊嶋亮司氏に厚くお礼申し上げます。

## 引用文献

- GURJEVA, E. L., 1989. Coleoptera: click-beetles (Elate-  
ridae). Subfamily Athoinae, Tribes Ctenicrini. *Fauna*  
*SSSR*, 12(3): 293.  
大平仁夫, 1993. 北海道とその周辺のコメツキムシ (IX).  
*Jezoensis*, (20): 163-167.  
大平仁夫・保田信紀, 2001. 層雲峡とその周辺のコメツキ  
ムシ (11). 層雲峡ビジターセンター研究報告, 21: 27-  
32.

(大阪市住吉区, 有本久之)

## ○根室支庁妹羅山で薄暮時に群飛したキクビカミキリモドキ

キクビカミキリモドキ *Xanthochroa atriceps* LEWIS は、体液中のカンタリジンによって人間の皮膚に炎症を起こす衛生害虫として著名であり、特に北海道では各地に普通に産し、山間地の人家の灯火には夏季に無数の個体が来集することがある。しかし灯火以外で観察される本種の個体数は少なく、森林内のショウマ等の花上で少数の個体が見られる程度である。筆者は、根室支庁の山地で薄暮時に群飛する本種を多数採集したが、これまでに本種のそのような生態を記録した文献を見出せないで、記録しておきたい。

26♂8♀, 30. VII. 2005, 北海道標津郡標津町妹羅山シュラ川源頭, 約380m (環境省メッシュ番号6544-47-44), 芳賀馨採集・保管。

採集地点は、標津町中心街の西北西約18kmに位置する妹羅山(1/50,000地形図では574.0mの無名峰)の東斜面を流下するシュラ川の源頭部右岸の林道上である。林道は河床から比高約50mを高巻いており、両岸斜面の植生は下部針広混交林を択伐した跡地で、ササ類, イタドリ等のヤブに切り残されたトドマツと広葉樹が散在するような状態で、見晴らしの良い地点であった。筆者は、この日17時00分ころから、同行者1人と、光源となる機器を一切使用せず、林道の谷側の縁に並んで座っていた。日没(当日の根室での日没時刻は17時57分)後の空の明るさが消え、ヘッドランプを点けないと手元がよく見えなくなった19時ころ、何かの昆虫が飛来して筆者の頭の上を歩き始めたので、採集してみると本種であった。その時は単なる偶然と思ったが、その後15分ほどの間に次々に本種が飛来し、筆者の上半身に止まって歩き回った。本種の標本が欲しくはなかったが、衣類の下に入り込まれたくもなかったので、1頭止まるごとに手探りで捕獲し、殺虫管に入れ、後刻数えると上記のとおりであった。本種が飛来した時間は上記のとおり非常に短く、その間に飛来した個体数は、払い落とした個体も含めると50頭ほどもあったと思われる。しかし、約2m離れた位置にいた同行者の体には1頭も飛来しなかった。

本種がなぜ群飛し筆者の体に止まったのかは全く想像がつかない。同行者の体に止まらなかったのは、筆者が喫煙しないのに対し同行者は1日に数十本を吸っていて、皮膚から発散する化学物質に忌避効果があったためかもしれない。いずれにしても興味深い生態と思い記録する次第である。

(埼玉県さいたま市, 芳賀 馨)

## 北海道産エゾカネコメツキ若干の形態

大平仁夫

Some morphological structures on *Limoniscus kato* (Coleoptera: Elateridae, Dendorometrinae) from Hokkaido, Japan

Hitoo ÔHIRA

**Abstract.** The elaterid-species of *Limoniscus kato* KISHII, 2002 was described as new to science from Hokkaido based on a male specimen. In the present study, the author examined some structures of this species including unknown female by SEM-images as shown in Fig. 1, A-F. This species seems to be widely distributed inland area of Hokkaido.

KISHII (2002) の研究によれば、日本に分布する *Limoniscus* 属のカネコメツキ類は 20 種知られていて、その検索表が示されている。その報告の中で、北海道から 2 新種が記載されている。本属の種は、美麗種が多いので興味があるが、形態の類似したものが多くいと地域変異もあるので、分類は簡単ではない。

筆者は日本産種について主に SEM を用いて調査を進めているが、ここでは KISHII (2002) が新種として記載したエゾカネコメツキの雄個体と未知の雌個体を含めて報告することにした。

本文を草するにあたり、標本資料について支援をいただいた札幌市の堀繁久氏と宮田達美氏の厚意に心から感謝の意を表す。

*Limoniscus kato* KISHII, 2002 エゾカネコメツキ  
(Fig. 1, A-F)

本種は KISHII (2002) が北見市の加藤敏行氏から提供された小清水町で採集 (14-VIII-2000, S. KAWAHARA leg.) に基づいて上記の学名を付けて新種として記載した体長 7.8 mm の 1 雄個体であるが、雌個体は未知であった。筆者が調査した個体は札幌周辺のものであるが、一般形態は原記載によく一致するので、これと同種と同定してここに示した。

雄 (Fig. 1, A)。体長は 8~8.5 mm。体は細長くて両側は平行状。体は上翅も含めて黒色で鈍い真鍮色の金属光沢を有し、上翅は翅底部と多くの個体では肩角部から後方に短く (上翅の長さの 1/5 ほど) に帯状の黄橙色の縦斑が伸長する。触角は黒~黒褐色、肢は暗褐色で脛節は黄褐色。体腹面は倒伏した灰黄色毛を一樣に生じる。

頭部の前頭部は幅広く三角状に凹状を呈し、頭頂部を除いて全面に粗雑点刻をやや密にほぼ一樣に生じる (Fig. 1, D)。前頭横線はよく発達し、前縁は切断状であるが、中央部は抑圧されて多少とも下方に湾曲する (Fig. 1, D↑)。触角の末端は前胸背板の後角より末端 1 節ほど後方に伸長、第 2 節は球状で第 3 節は倒円錐状を呈し、共に短小でほぼ等長、第 4 節から鋸歯状を呈し、第 4 節は第 2, 3 節を合わせたものと同様等長であり、第 5 節は第 4 節とほぼ等長である (Fig. 1, E)。

前胸背板は弱い台形状で幅より長く、背面から見た両側は後角末端近くでもっとも幅広い (Fig. 1, B)。背面は膨隆し、正中部には平滑線や凹溝は生じないが、基部近くには短く浅い平滑凹線を有する (Fig. 1, B↑)。また、背面は全面に円形状の深い点刻をやや密に生じ、点刻と点刻間の幅は、点刻の直径とほぼ等しいが、側方はより密に印する (Fig. 1, C)。また、表皮面は不規則な縦しわ状を呈する (この SEM 図ではしわは示されていない)。前胸背板の後角は内方に湾曲し、末端は鈍くとがる (Fig. 1, F↑)。また、各背面には明瞭な 1 隆起線を有する。

交尾器の背面からの中央突起は側突起より細長く、末端部は細まって伸長し、末端は鈍くとがる。側突起の末端部の三角状部は幅より長く、側縁は湾曲して細まり、末端は鈍くとがる。また側縁部には 2 本の長い感覚毛を生じ、後角は後外方にとがる (Fig. 1, G)。

雌は体長 8~9 mm 内外で、雄とは大差がないが、体はより幅広く、両側はより平行状である (Fig. 1, H)。触角は短く、末端は前胸背板の後角より明らかに短く (Fig. 1, H)、第 2, 3 節は雄個体と同様に短小で、第 4 節から鋸歯状を呈するが、第 4 節は第 2, 3 節を合わせたものよりやや短く、第 5 節は第 4 節とほぼ等長である (Fig. 1, I)。上翅の第 4~7 間室には、肩角部から後方に伸びる黄橙縦斑を有し、中央部あたりから漸次不明瞭になるが、大部分の個体は翅端あたりまで伸長する (Fig. 1, H)。

調査標本: ♂, [札幌市] 西岡, 3-VI-1995 (SEM に使用した個体); 西岡 (西岡水源池), 8-VI-1995; 砥山 (観音沢), 26-V-1995, (図示した成虫); 同上, 30-VI-1998; 定山系 (豊平峡), 20-VI-2002. ♂, [江別市] 野幌, 23-VI-2004, 堀採集 (アカネコール)。

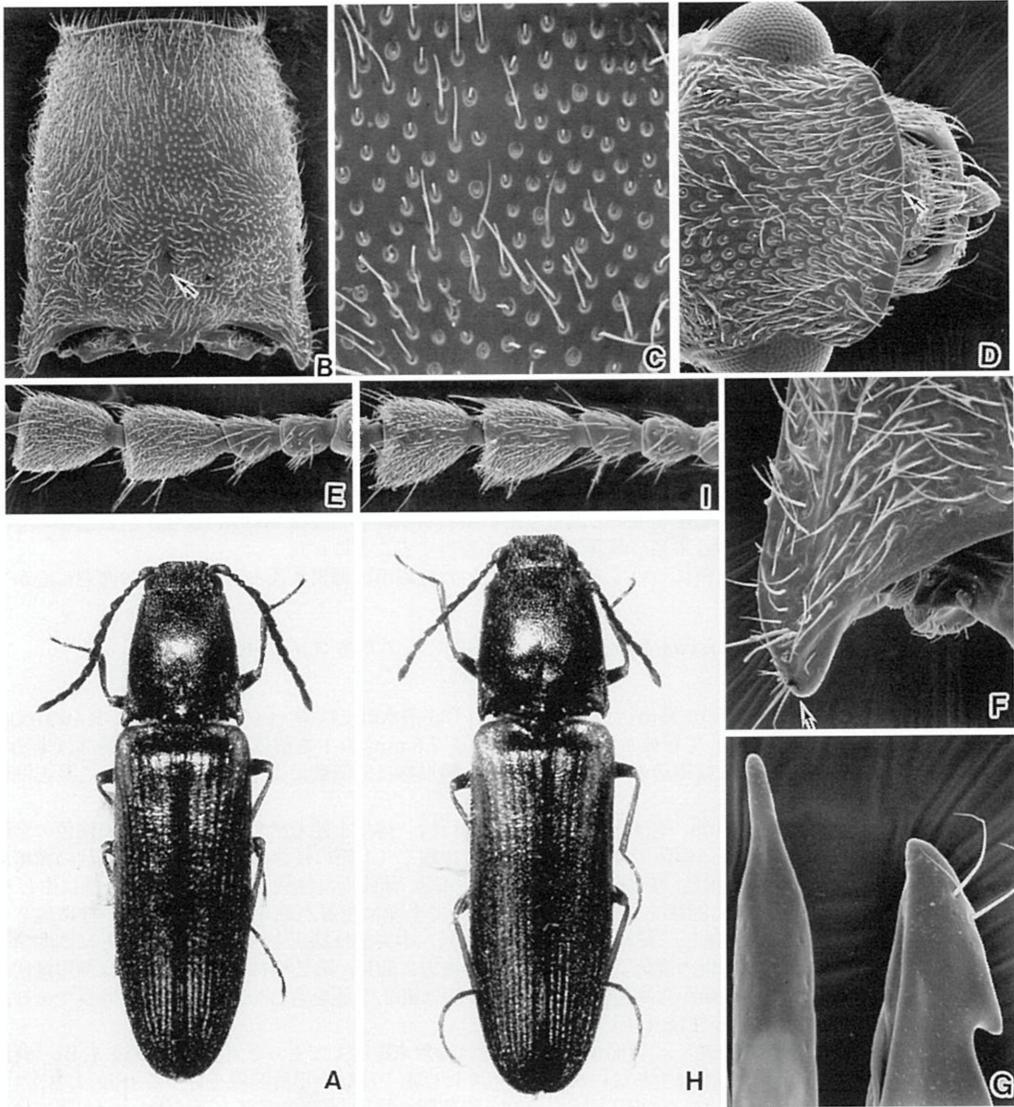


Fig. 1. A-F, Adult structures of *Limoniscus katoii* (エゾカネコメツキ): A-F, male and H and I, female. A, body length 8 mm; H, body length, 8.5 mm; B, pronotum, dorsal aspect; C, some punctures on the disc of pronotum; D, head, dorsal aspect; E and I, 2nd to 5th segments of right antenna; F, left hind corner of pronotum; G, apical portion of male genitalia, dorsal aspect.

♀, [札幌市] 西岡 (西岡水源池), 8-V-1995; 同上, 3-VI-1995, (SEMに使用); 砥山 (観音沢), 26-V-1990, (図示した成虫). ♀, [せたな町 (旧瀬棚町)], 須築, 4-VI-1989; 同上 (旧檜山町, 愛知浮島公園), 9-VI-2002. ♀, [江別市] 野幌 (野幌森林公園), 24-V-2001; 野幌, 12-V-2002, 堀採集 (FIT). (堀採集と記入以外はすべて宮田氏採集).

引用文献

KISHII, T. 2002. Two new species of the genus *Limoniscus* REITTER, 1905 (Coleoptera: Elateridae) from Hokkaido, Japan. *Ent. Rev. Japan*, 57(2): 129-138.

(〒444-3511 岡崎市舞木町狐山6-4)

## 都市部の人工池で確認したマダラコガシラミズムシ

田島文忠

Record of *Haliplus sharpi* in an urban artificial pond

Fumitada TAJIMA

**Abstract.** *Haliplus sharpi* was collected from an urban artificial pond, in which it was not believed to live before. The water quality of the pond, nitrogen and phosphorus, was at lower level. It is considered that *Haliplus sharpi* could live in urban artificial water area, in case the area has necessary conditions for it.

## 1. はじめに

マダラコガシラミズムシ *Haliplus (Liaphlus) sharpi* WEHNCKE, 1880 は、環境省レッドリストで準絶滅危惧(環境省, 2007) に掲載されている希少種であり、平野部の水草が繁茂する自然良好な池沼(愛知県, 2002) に生息している。

今回、都市部の人工池において本種を確認した。本種の生息環境として知られている自然度の高い環境とは異なる場所での確認事例として報告する。

## 2. 採集記録

1 ex., 埼玉県川口市舟戸町, 26. VIII. 2006, 筆者採集保管。(図1)

本種を確認した場所は、荒川の河川敷にある石積み護岸された人工池である。池は荒川から約20 mのところであり、長径75 m, 短径15 m程度の細長い形状である。

調査当日の池の状況は、池底の石張りの上に薄く泥状の底質が堆積しており、沈水植物としてシャジクモ属の一種(シャジクモ *Chara braunii* と思われるが詳細は不明) が生育していたが、他の水生植物はほとんど見られない状況であった。その他、ハイイロゲンゴロウ *Eretes sticticus* が確認された程度であり、全体的に生物相は貧弱な印象であった。今回、水深5 cm程度の浅い場所において、底質のすくい取りによって採集した。

池の取水源は、荒川の増水による冠水や雨水によるものと思われる。当地における過去の冠水状況は、荒川の洪水と治水事業(国土交通省荒川下流河川事務所, 2007) より、A.P.+3.50 m前後の水位で冠水すると思われた。次に、水文水質データベース(国土交通省河川局, 2002) より、水位月表検索から過去の水位を調べたところ、本種発見前では2004年10月にA.P.+3.69 mに達し、冠水したと思われた。以上から、調査当日は冠水後2年近く経過していたと思われた。当地の冠水頻度は、概ね1~2年に1回程度で推移していると思われた。

## 3. 水質分析

本種の生息環境を検討するため、確認場所の池(以下、調査池とする)と隣接している荒川の水質分析を実施した。



図1. マダラコガシラミズムシ 埼玉県川口市産。

(1) 方法

分析試料の採取は本種採集日に実施し、調査池内の本種確認地点および荒川沿岸部の表層水を採取した。pH、電気伝導度はポータブル水質計 (TOA DKK 製) を使用した。重炭酸イオン ( $\text{HCO}_3^-$ ) を除く溶存塩類はイオンクロマトグラフ法で分析した。重炭酸イオンは陽イオンと陰イオンとの電荷バランスより算出した。無機態窒素はアンモニア態窒素 ( $\text{NH}_4^+-\text{N}$ )、亜硝酸態窒素 ( $\text{NO}_2^--\text{N}$ )、硝酸態窒素 ( $\text{NO}_3^--\text{N}$ ) の合算で算出した。

次に、溶存塩類のうち主要成分を当量濃度 (meq/l) に換算し、ヘキサダイアグラム (鶴巻, 1998) を作成した。これはグラフの左側に各陽イオン、右側に各陰イオンの当量濃度をプロットして各点を結んだものであり、中央からの距離が各成分の当量濃度の大きさを表している。ヘキサダイアグラムの作成には Excel アドイン工房 (<http://www.jomon.ne.jp/~hayakari/index.html>) 提供による地図上グラフ作成 Ver. 2.6 を使用した。

なお、溶存塩類の分析結果については、当量濃度から電気伝導度の計算を行い、ポータブル水質計で測定した実測値との比較による精度確認を行っている。

(2) 結果

水質分析結果を表 1、ヘキサダイアグラムを図 2 に示す。表 1 より、調査池の水質は pH 8.4 と高めであった。また、無機態窒素が 0.4 mg/l、リン酸態リン ( $\text{PO}_4^{3--}\text{P}$ ) が <0.1 mg/l であり、窒素、リンは低濃度であった。一方、荒川の水質は pH 6.9 と中性であり、無機態窒素が 5.2 mg/l と多量に窒素成分を含んでいた。

次に、図 2 より溶存塩類の成分を比較したところ、調査池はカルシウムイオン ( $\text{Ca}^{2+}$ ) と重炭酸イオンを優勢成分とする組成であった。これは日本の河川水の平均に近い特性である (鶴巻, 1998)。一方、荒川はカルシウムイオンと重炭酸イオンは調査池とほぼ同量であるのに対して、硝酸態窒素、ナトリウムイオン ( $\text{Na}^+$ )、塩化物イオン ( $\text{Cl}^-$ )、硫酸物イオン ( $\text{SO}_4^{2-}$ ) が多く含まれ、調査池とは明らかに成分組成が異なった。

表 1. 水質分析結果

採取場所	pH	電気伝導度 mS/m	無機態窒素 mg/l	$\text{NH}_4^+-\text{N}$ mg/l	$\text{NO}_2^--\text{N}$ mg/l	$\text{NO}_3^--\text{N}$ mg/l	$\text{PO}_4^{3--}\text{P}$ mg/l
調査池	8.4	12.1	0.4	0.4	<0.1	<0.1	<0.1
荒川	6.9	30.5	5.2	1.0	0.1	4.1	<0.1

採取場所	$\text{Na}^+$ mg/l	$\text{K}^+$ mg/l	$\text{Mg}^{2+}$ mg/l	$\text{Ca}^{2+}$ mg/l	$\text{F}^-$ mg/l	$\text{Cl}^-$ mg/l	$\text{SO}_4^{2-}$ mg/l	$\text{HCO}_3^-$ mg/l
調査池	2.5	3.7	0.9	20.1	0.1	2.6	5.8	67.5
荒川	24.4	4.9	5.8	24.4	0.1	29.9	32.0	69.7

※<0.1 の表記は、定量下限値以下を示す。

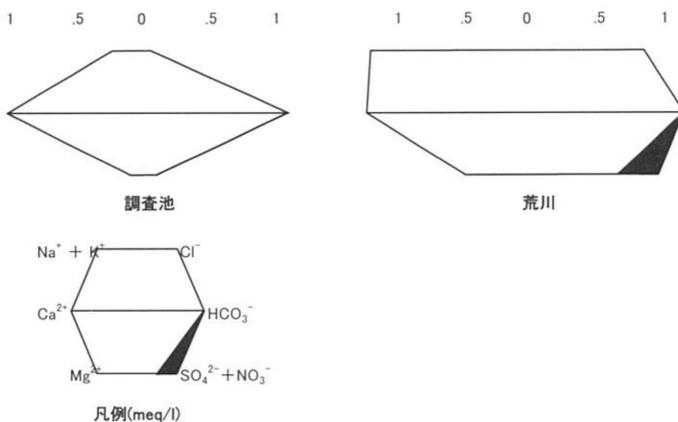


図 2. ヘキサダイアグラム。

※ $\text{NO}_3^-$  は黒色で表記し、区別できるようにしている。

## 4. 考 察

本種を確認した調査池は市街地に隣接しており、河川敷内も公園として利用されている。周辺には生息環境として報告されているような自然度の高い水域は見あたらないことから、近隣から移動してきたことは考えにくい。埼玉県では、これまでに北本市（牧林，1995）、小川町（高橋，2000）、嵐山町（新井，2005a）で確認されている。いずれも当該地よりも上流に位置していることから、荒川の増水の際に上流部の生息地から流されてきた可能性が高いと考えられる。しかし、本種の発見時は、冠水後2年近く経過していると考えられ、水質分析からも成分組成が調査池と荒川とで異なり、長期間分断されていたことを裏付ける結果であった。そのため、本種は上流の生息地から増水により流されてきた後、調査池で定着していた可能性も考えられる。

調査池ではシャジクモ属の一種が確認されたが、シャジクモなどの沈水植物は、窒素、リンなどの増加により富栄養化が進むことで植物プランクトンが増加、水中の照度が低下して消滅する（土山，2003）。調査当日の調査池は水の透明度も高く、底床にも日光が届いていた。調査池では藻類などの光合成の影響でpH値が高くなった可能性があり、沈水植物にとって十分な照度が得られていたと思われる。

一方、荒川の水質は硝酸態窒素をはじめ、ナトリウムイオン、塩化物イオン、硫化物イオンが多く、家庭排水などの人為的汚染の影響を受けていると考えられ、窒素分も過剰であった。これらの成分が流入しなかったため、調査池では貧栄養で透明度の高い状態が維持され、沈水植物に適した環境であったと考えられる。

以上のことから、調査池自体は自然度の高い水域ではないものの、窒素、リンなどの栄養塩類が少なく、透明度の高い沈水植物の生育に適した水質であったことが本種にとって好適な条件の一つであった可能性がある。調査データが少なく推論の域を出ないものの、今回の事例は条件さえ揃えば自然度の低い環境でも生息地となる可能性を持っていることを示す一例かもしれない。

しかし、本種は微環境に固執している可能性が高いと考えられる（新井，2005b）ことから、生息条件を明らかにするためには、他生息地も含め、多くの生息環境の情報収集が必要である。今後も調査、分析を継続し、生息条件の解明に努めていきたいと考えている。

## 謝 辞

末筆ながら、本稿を取りまとめるにあたり、新井浩二氏、柳田紀行氏から文献のご教示と貴重なご意見を頂いた。佐藤丈弘氏には取りまとめにご協力頂いた。平田義之氏には調査池をご教示頂き、調査に同行頂いた。水質分析に関して、北見秀明博士から資料をご恵与頂き、黒木賢二氏には分析のご協力を頂いた。ここに厚くお礼申し上げる。

## 引用文献

- 愛知県，2002. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックあいち 一動物編一. 596 pp. 愛知県.  
 新井浩二，2005a. 嵐山町の甲虫類. 嵐山町博物誌調査報告，(10): 117-183.  
 新井浩二，2005b. 埼玉県利根川流域のクビボソコガシラミズシ. 寄せ蛾記，(118): 17-23.  
 国土交通省荒川下流河川事務所，2007. 荒川流域のポータルサイトARA. <http://www.ara.go.jp/index.html>  
 環境省，報道発表資料，2007. 哺乳類，汽水・淡水魚類，昆虫類，貝類，植物I及び植物IIのレッドリストの見直しについて. <http://www.env.go.jp/press/press.php?serial=8648>  
 国土交通省河川局，2002. 水質水質データベース. <http://www1.river.go.jp/>  
 牧林 功，1995. 北本市の甲虫類. 北本市動物誌. pp.195-246. 北本市.  
 高橋 守，2000. 小川町の甲虫類. 小川町の自然 動物編. pp.209-234. 小川町.  
 鶴巻道二，1989. 地下水の挙動を水質から診る. 中世古幸次郎教授退官記念論文集: 29-40.  
 鶴巻道二，1998. 地下水の調査. 改訂 地下水ハンドブック編集委員会編. 改訂 地下水ハンドブック. pp.365-384. 建設産業調査会，東京.  
 土山ふみ，2003. ため池という水環境. 水環境学会誌，26(5): 246-251.

(昭和環境システム(株))

## ○カタモンチビコメツキの冬季における採集記録

カタモンチビコメツキ *Pronegastrius humeralis* (CANDÈZE) は、川原の砂地などで普通に観察される体長1.8~2.2 mmの小さなコメツキムシで、冬季における採集例はないように思われる。筆者は、12月に本種を採集することができたのでここに報告したい。採集された場所は、丹沢山塊の麓に広がる山林の間を流れる中津川の上流域（標高351 m）で、川面から1 mほど上がった河岸段丘である。段丘上面（幅3 mほど）は、平らに整地され、スギゴケ、スキ、カヤツリグサ類などがまばらに生えているものの、赤土土壌がほむき出しの状態であった。

検することのできたすべての個体は、この表層部の土壌を篩にかけて抽出したものである。

10 exs, 10. XII. 2007, 6 exs, 31. XII. 2007, 神奈川県足柄上郡松田町寄、筆者採集保管。

本種について多くのご教示を賜り、本記録の発表をお勧めいただいた鈴木 互博士に深く感謝申し上げます。

## 参考文献

- 大平仁夫・鈴木 互，1985. コメツキムシ科. 原色日本甲虫図鑑. Ⅲ: 53-92. 保育社.

(神奈川県足柄上郡、大塩一郎)

## 福岡県初記録となるシマケシゲンゴロウの採集記録

工藤雄太・井上大輔・中島 淳

シマケシゲンゴロウ *Coelambus chinensis* (SHARP) は国内では北海道、本州の中部以北、および九州から知られる北方系のゲンゴロウ科の一種である(森・北山, 2002)。筆者らは福岡県において初記録となる本種を確認したので、ここに報告する。なお、種の同定は森・北山(2002)によった。

1 exs, 4. VI. 2006; 2 exs; 13. VII. 2006; 1 exs, 7. VIII. 2006; 1 ex, 4. VIII. 2007; すべて福岡県北九州市若松区安屋, 筆者ら採集。標本は北九州市立自然史・歴史博物館および北九州高校保管。

今回採集したのは北九州市若松区の直線距離でそれぞれ700 mほど離れた3つのため池である。2006年6月に本種を採集した池は、ガマが繁茂し池底を踏むとメタンガスが沸き上がる状態であった。また、2006年7月、8月に採集した池は、ハスが繁茂し水中には水生植物が豊富で水質は比較的良好であった。さらに、2007年に採集した池は、ヒシ、ヨシ類が繁茂し、水深の浅い濁った池であった。以上のように今回本種が採集された池は、距離としてはそれぞれ近い場所にあるものの、その環境はかなり異なっている。これらの池における本種の個体数は大変少ないようで、複数回の調査を行ったものの、上記採集個体以外は得られなかった。



本種は日本国内において局地的に分布し一般的に個体数は少ない。そのため、岩手、宮城、栃木、三重、奈良、熊本の各県版レッドリストに記載されている(森・北山, 2002)。また、九州における採集記録は極めて少なく、これまで熊本県と大分県からそれぞれ1例の記録があるのみである(黒佐, 1949; 松井, 1992)。今回発見された生息地周辺における生息数は少ないが、複数個体が得られていることから、再生産している可能性は高い。また、本種の採集されたため池およびその周辺では、全国的な希少種であるキボシチビコップゲンゴロウ、オオマルケシゲンゴロウ、ホソマルチビゲンゴロウ、コガタノゲンゴロウ、九州北部で産地が極限されるウスイロシマゲンゴロウ、チャイロチビゲンゴロウなどの生息を確認している。これらのことから、当該地域は水生甲虫類の生息環境として極めて重要である。今後、不用意な環境改変が行われ、これらのため池・湿地環境が消失することがないように注意する必要がある。筆者らも引き続き調査を継続していきたいと考えている。

なお、松井(1992)は熊本県で採集した本種について、本州産と若干の差異があったことを記している。今回は得られた個体数が少なく、詳細な検討は行わなかった。今後の課題としたい。

末筆ながら、種々ご教示いただき、参考文献の入手に協力して下さった、森 正人(環境科学株式会社)、林成多(ホンザキグリーン財団)、箕島悠介(東京農業大学)の各氏にお礼申し上げる。

## 参考文献

- 黒佐和義, 1949. 四国及び九州より新発見の龍蝨7種. 近畿甲虫同好会会報, 4(2): 5-10.  
 松井英司, 1992. 天草諸島の水生甲虫. 熊本昆虫同好会報, 38(1): 1-20.  
 森 正人・北山 昭, 2002. 改訂版図説日本のゲンゴロウ. 231 pp. 文一統合出版.

(工藤: 東京農業大学)  
 (井上: 北九州高校)  
 (中島: 九州大学水産実験所)

## ヤギホソキコメツキ雄の形態について

有本久之

Notes on the male structure of *Prokraerus (Prokraerus) yagii*  
(Coleoptera, Elateridae, Megapenthini) from Taiwan

Hisayuki ARIMOTO

ヤギホソキコメツキ *Prokraerus (Prokraerus) yagii* KISHII は、台湾の Sankuang (松崗) において故八木正道氏によって採集された 1 雌固体に基づき KISHII (1994) が新種として記載した種であるが、その後の追加記録はない。筆者は最近、複数の本種と判断される標本を検査することができた。それらの中には、これまで未知であった雄も含まれていた。ここでは雄の形態の概要を中心に報告する。

今回検した雌の一部は岸井尚博士に種名の確認をして頂いた。心よりお礼申し上げる。また、京都市の正木清氏、Genova の Serjio RIESE 氏、宝塚市の山下晶氏には貴重な標本の支援を頂いた、厚くお礼申し上げる。

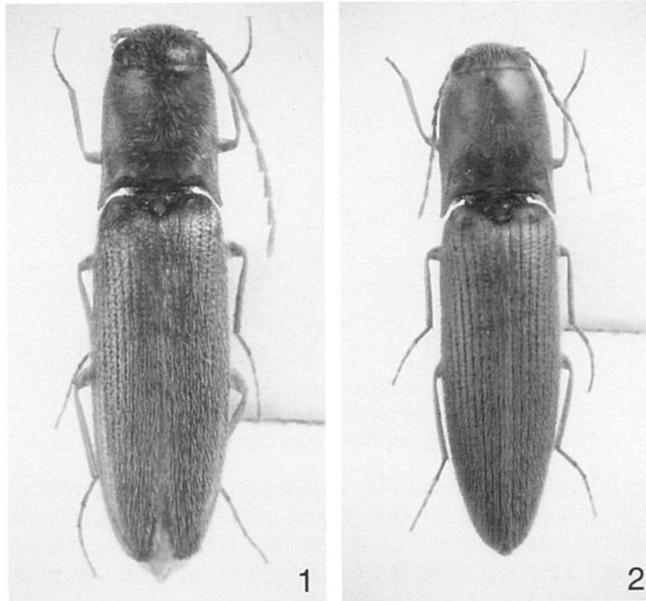


Fig. 1. ヤギホソキコメツキ *Prokraerus (Prokraerus) yagii* KISHII, ♂.

Fig. 2. ヤギホソキコメツキ *Prokraerus (Prokraerus) yagii* KISHII, ♀.

## 調査標本

1♂, Nanshanchi, Nantou Hsien, Taiwan, 13. V. 1974, K. SUGINO leg. 1♂1♀, Wushe, Nantou Hsien, Taiwan, 13. V. 1978, S. IMASAKA leg. 1♀, Nanshanchi, N antou Hsien, Taiwan, 26. IV. 1981, A. YAMASHITA leg. 1♀, Shanping (640 m), Kao-hsiung Hsien, Taiwan, 1.-10. IV. 1988, R. DAVIDSON, J. RAWLINS, C. YOUNG leg. 1♂1♀, Shanping (640 m), Kao-hsiung Hsien, Taiwan, 11.-20. IV. 1988, R. DAVIDSON, J. RAWLINS, C. YOUNG leg. 1♀, Shanping (640 m), Kao-hsiung Hsien, Taiwan, 21.-30. IV. 1988, R. DAVIDSON, J. RAWLINS, C. YOUNG leg. 1♀, Shanping (640 m), Kao-hsiung Hsien, Taiwan, 11.-20. V. 1988, R. DAVIDSON, J. RAWLINS, C. YOUNG leg.

## 形態の概要

雄 (Fig. 1). 体長 6.5~7.5 mm; 幅 1.4~1.8 mm. 体は細長くて両側は平行状、背面はやや膨隆する。頭部と前胸背板はやや光沢を有するが、上翅の光沢はほとんどない。体色は黄褐色~褐色で頭部の大部分と前胸背板の中央部は黒褐色である。体背面は黄褐色の針状毛で覆われる。

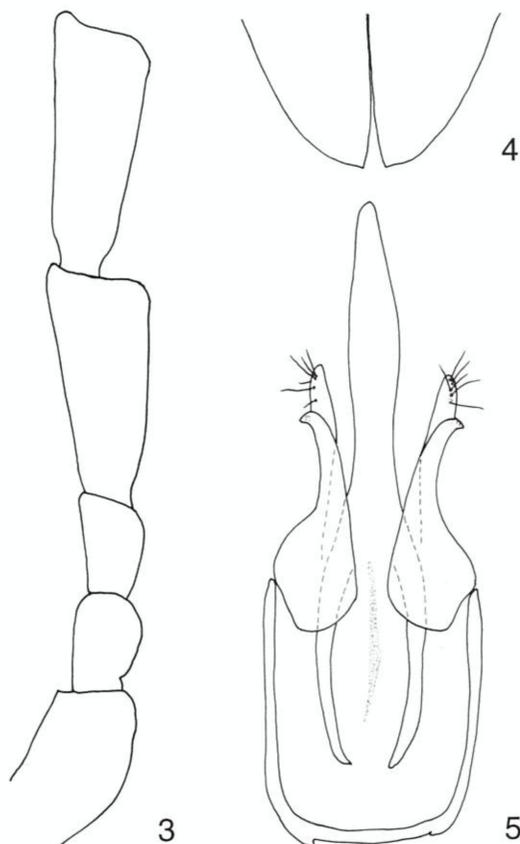


Fig. 3. 2nd to 5th segments of left antenna.

Fig. 4. Apical portion of elytra.

Fig. 5. Male genitalia, dorsal view.

頭部は複眼間でわずかに膨隆し、前頭部は扁平状、前頭横隆線はよく発達し、前縁中央部は外方へ弧状に突出する。表面は粗雑で浅い点刻を密に印する。触角 (Fig. 3) は細長く、前胸背板後角の先端より末端 2 節ほど後方に伸長する。第 2 節は短小で幅よりやや長く、第 3 節は倒円錐形状で 2 節よりわずかに長い、第 4 節は第 2, 3 節を合わせた長さの約 1.2 倍の長さで第 5 節よりわずかに短い、第 4 節から第 10 節までは鋸歯状を呈し、各節の外側部には縦隆線は生じない。

前胸背板は長さと同幅がほぼ等長、両側は後半部でほぼ平行状である。背面の点刻は頭部より深く小型で、まばらに印し、点刻間の表面は前半部では平滑で光沢を有するが、後半部では微細な顆粒状の隆起物を密布し、光沢は鈍い。後角は真直ぐ後方に伸長して先端は鈍く尖り、背面に明瞭な 1 隆起線を有する。前胸腹板突起は側面から見たとき、前肢基節腔を超えて内方に湾曲して真直ぐ後方に伸長し、末端近くで上面に弱く段刻を生じる。小盾板は細長い三角形形状である。

上翅は細長く肩部幅の約 2.8 倍の長さ、基部 1/2 は平行状、そこから末端に向かって湾曲して漸次細まる。翅端部 (Fig. 4) は切断状ではなく多少の個体差はあるが概ね図に示した形をしている。条線はやや深く明瞭に印し点刻列を備える。間室部は隆起し、顆粒状の隆起物をまばらに有し、表面は不規則で微細な横皺状を呈する。

交尾器 (Fig. 5) の中央突起は細長く、基部近くで明瞭にくびれを生じ、先端部は漸次細まり鈍く尖る。側突起は短く、先端部は細長い三角形形状で、外角部は鳥のくちばし状に突出し、少数の段刻を生じる。

雌 (Fig. 2)。体長 7.5~9.0 mm; 幅 1.8~2.0 mm。一般外形は雄に類似するが、より大型で前胸背板の両側は外方に弱く湾曲する。触角は短く末端節は前胸背板の後角の先端にとどく程度で、雄との区別は容易である。

#### その他

今回の調査でこれまで未知であった雄が判明したが、その一般外形は台湾に広く分布するソナンホソコメツ

キ *Prokraerus (Prokraerus) sonami* (MIWA, 1929) に似るが、ソナンホソコメツキはつや消し状で光沢はなく、全体が黒褐色であるので区別は容易である。また、属は異なるが日本の本州に分布するニホンツヤケシコメツキ *Megapenthes shirozui narukawai* KISHII, 2006 にもよく似ている。南西諸島や台湾を含む東南アジアには *Prokraerus* 属や近縁の属に含まれる種が数多く分布しており、一見非常に似た形態をした種でも、よく調べてみると別属の種であったり、多種多様に分化している。今後もこれらの地域から多くの新しい種類が発見されるであろうが、将来的には属の整理や種の所属の再検討が必要と思われる。

#### 引用文献

- KISHII, T., 1994. Notes on the Taiwanese Elateridae collected by Mr. M. YAGI in 1992, with the descriptions of three new species (Coleoptera). *Ent. Rev. Japan, Osaka*, **49**: 5-15, pls. 1-2.  
 KISHII, T., 2006. A revisional study on *Megapenthes shirozui* (Coleoptera: Elateridae) and its allied species from Japan, with descriptions of four new taxa. *Ent. Rev. Japan, Osaka*, **61**(1): 55-68, 6 figs.  
 SUZUKI, W., 1999. Catalogue of the family Elateridae (Coleoptera) of Taiwan. *Misc. Rept. Hiwa Mus. Nat. Hist.*, (38): 1-348.

(大阪市)

#### ○ヒラタコメツキモドキを東京都板橋区で採集

東京都本土部では記録がなかったヒラタコメツキモドキ *Xenoscelinus hiranoi* SASAJI を東京都板橋区で採集しているのを報告する。

1♀, 東京都板橋区赤塚 5-35 都立赤塚公園城址地区, 17. VIII. 2003, 2♀, 同地, 10. VII. 2005, 1♂1♀, 同地 27. VIII. 2005, 1♂, 同地, 28. V. 2006, 以上全て筆者採集・保管。

上記採集例はすべてクヌギ、コナラ、イヌシデを主とした雑木林林内で、ブラックライトを使用した灯火採集によるものである。白幕に留まっていた小型甲虫類を手当たり次第、吸虫管に吸い込んだものの中から見つかった。当地は板橋区で最も面積が広い雑木林が残されている地点で、区内他地点では未だ本種は発見されていない。

本種は神奈川県以西の各地から記録されていたが、最近の福島県内陸部の採集例から判断すると、冷温帯落葉広葉樹林から暖温帯照葉樹林にかけて広い範囲に生息する種と思われる。すでに記録が多い神奈川県以外にも、関東地方各県の樹林地で本種が発見されることが予想される。

#### 参考文献

- SASAJI, H., 1989. Discovery of the curious beetle genus *Xenoscelinus* GROUVELLE (Languriidae-Cryptophilinae) from Japan. *神奈川虫報*, (90): 223-228.  
 磯野昌弘・斉藤直彦, 2007. 福島県におけるヒラタコメツキモドキの記録. *甲虫ニュース*, (159): 6.  
 東京都本土部昆虫目録作成プロジェクト, 2007. 東京昆虫目録 (<http://homepage3.nifty.com/TKM/>).

(東京都板橋区, 釣巻岳人)

#### ○チャイロムネミゾツブエンマムシを北海道で記録

チャイロムネミゾツブエンマムシ *Plegaderus shikokensis* HISAMATSU, 1985 は愛媛県産の 2♂ をもとに記載され、その後、本州からも平野 (1986) により記録された。本種は、体長が 1.1~1.3 mm と小型であるが、前胸背板や中後胸腹板および前脛節に特異な形態を有することから同定は容易である。しかし、これまでの採集事例は非常に少ない。今回、新たに北海道において 3 頭の捕獲を確認したので報告する。

札幌市豊平区羊ヶ丘: 1♀, 12~19. VII. 1999; 1♂, 19~26. VII. 1999; 1♂, 12. VI. ~3. XI. 2000, 磯野昌弘採集。

採集地はミズナラやシラカバ、イタヤカエデ、トドマツなどが優占する老齢林であり、いずれの個体もエタノールを誘引源とする黒色のサンケイ化学社製「昆虫誘引器」で捕獲された。このトラップは衰弱木や腐朽木に集まる甲虫類を特異的に捕集することが知られており、朽ちたブナ樹皮下からの採集事例 (平野, 1986) があることも考えあわせると、本種は、同属の既知種と同様、穿孔虫の孔道内に生息するものと考えられる。

#### 引用文献

- HISAMATSU, S., 1985. Notes on some Japanese Coleoptera. I. *Trans. Shikoku Ent. Soc.*, **17**(1/2): 5-13.  
 平野幸彦, 1986. チャイロムネミゾツブエンマムシ本州に産す. *月刊むし*, (187): 42.  
 (森林総合研究所東北支所, 磯野昌弘)

## 日本産ニセマルトビハムシ属(ハムシ科, トビハムシ亜科)の 地理的分布と寄主植物

鈴木邦雄・南 雅之・今坂正一・多比良嘉晃  
木附嘉理・磯輪亮太

An outline of geographical distribution and host plants of the Japanese  
species of the genus *Schenklingia* (Chrysomelidae, Alticinae)

Kunio SUZUKI, Masayuki MINAMI, Shoichi IMASAKA, Yoshiaki TAHIRA,  
Yoshimichi KITSUKI, and Ryota ISOWA

### はじめに

ニセマルトビハムシ属 *Schenklingia* CSIKI et HEIKERTINGER, 1940 [*Eucycla* BALY, 1876 に対する新名として創設された] は、ハムシ科・トビハムシ亜科に属し、アジアの極東地域から東南アジア一帯・ミクロネシアにかけて広く分布し、これまでに約30種が知られている。日本には、次の4種1亜種が分布している: 1. ジュウニホシニセマルトビハムシ *Schenklingia duodecimmaculata* (CHEN, 1934) [以下不都合のない限りジュウニホシと略記], 2. ヒラノニセマルトビハムシ *S. hiranoi* TAKIZAWA, 1982 [ヒラノ], 3. トホシニセマルトビハムシ *S. kasuga* NAKANE, 1963 [トホシ], 4. ムツボシニセマルトビハムシ *S. sauteri* (CHEN, 1934) が、屋久島に屋久島亜種 *S. s. insularis* NAKANE, 1984 が、それぞれ分布している。いずれも体長2~4ミリ内外の小形半球形の種である。中根(1963)はこれら4種のうちトホシを[その新訂版の鈴木・滝沢(2007)も参照] 図説、木元(1984, 1994)はムツボシとヒラノを図説するとともにトホシとジュウニホシにも言及、滝沢(2006)は4種の概説をしている。

本属の種は、いずれも採集記録がひじょうに乏しく、稀少種と考えられてきた。しかし、2006年夏、トホシの寄主としてウラボシ科のヒメノキノブが東京都下(中村, 2006)と神奈川県下(高桑・荻部, 2006)とでほぼ同時に確認されて以降、本種が同じウラボシ科のマメツタ(廣川・高橋, 2007; 城戸, 2007a)とピロードシダ(中村, 2007)も寄主としていることが相次いで判明し、それと呼応するかのようには本州と九州の各地から続々と採集記録が報告された。トホシの既知産地は、筆者らが知り得た限り、後に詳述するように1都10県に及んでいるが、2007年、鈴木は鳥取県下で、今坂は大分県下で、それぞれ本種を発見した。その結果、本種の既知産地は、本州の1都7県、九州の5県へと広がった。この属の寄主については、既にKATO(1991)が、沖縄本島産のヒラノがマメツタを、屋久島産のムツボシ屋久島亜種がやはりウラボシ科のイワヒトデとオオイワヒトデを、それぞれ報告している。KATO(1991)は、さらに両種の幼虫形態や生活史の断片を明らかにしていたが、事実上ほとんど埋もれていたきらいがある。ジュウニホシの寄主については、これまでのところ不明であるが、やはりウラボシ科である可能性が高い。

寄主植物が判明してきたことによって、今後この属の地理的分布や生活史などについての解明が進むものと期待される。特に、分布の空白地帯についての調査が望まれる。本属の種は、ほとんどウラボシ科の着生シダを寄主としているが、今坂(2007)は、本属の種の採集には自身が命名した「幹掃き法」(幹に着生したシダを手筈で軽く掃くようにして叩き網かネットで受ける採集法)が有効であることを指摘しており、鈴木もそれによって成果を上げている。

本稿では、日本産ニセマルトビハムシ属4種1亜種について、主に地理的分布と寄主植物に関する既知見をまとめるとともに、トホシとムツボシ基名亜種に関しては筆者らの手許の未公表の新産地と、既知産地ではあっても未公表の採集データも併せて報告する。また、各種の既知産地(分布地図参照)を鳥瞰し、今後、各種の調査の的をどの地域に絞るべきかについても考察したい。

なお、*Schenklingia* 属の基和名であるが、CHOJÓ & KIMOTO(1961)は「クロホシトビハムシ」、大野(1971)は「ニセマルトビハムシ」とし、中根(1963)は *S. kasuga* に「トホシニセマルノミハムシ」の和名をあてている。Alticinae 亜科の種の基和名であるが、英語の flea beetle に基づく「ノミハムシ」も捨て難いが、鈴木・滝沢(2007)は原義に基づく「トビハムシ」に統一しており、この属の基和名についても大野(1971)の提唱した「ニセマルトビハムシ」を使用することとする。また、寄主植物の学名に関しては、既記録のものも対応がつく限り全て岩槻編(1992)に従って初出時に明記した。

本論文を故小宮義璋博士の御魂に捧げる。博士は、神経生化学の分野で100篇を超える原著・総説論文を公表されたが、ハムシ科の分類・生物地理に関しても多くの論文を公表された。2006年8月1日、トホシニセマルトビハムシの調査中に東京都下奥多摩で急逝された。博士の昆虫学関係の研究業績に関しては、南・滝沢

(2007)を見られたい(甲虫ニュース, (158): 13-15). 博士の収蔵標本の調査に快く応じていただき, 多くの未公表採集記録の収録をお許しいただいた道子令夫人に厚くお礼申し上げる. 本論文をまとめるにあたり, 次の多くの方々に関係論文の別刷りコピーをご恵与いただいたり未公表データの提供などご協力をいただいた: 故中條道夫博士, 平野幸彦氏, 石井 実博士, 苅部治紀氏, 加藤 真博士, 加藤 徹氏, 木元新作博士, 木村智亮氏, 中村裕之氏, 西原昇吾博士, 大野正男氏, 岡田麻利氏, 齋藤 慎氏・多田内 修博士, 高桑正敏博士, 滝沢春雄博士. 明記して謝意を表す.

### 日本産ニセマルトビハムシ属の地理的分布と寄主植物

日本産ニセマルトビハムシ属 4 種 1 亜種の地理的分布と寄主植物などについて, 以下に既知情報をまとめ, トホシとムツボシ基名亜種については, 新産地と未公表の採集記録などを報告する. 各種の分布は, ほぼ北東から南西の順に配列し, 本州・九州・南西諸島における初記録は( )内に文献を挙げた. 国外の分布は, 依拠した主要文献を挙げた. 既知産地も, 都道府県または島嶼ごとの記録をほぼ北東から南西の順に記し, ( )内に文献を挙げた. 追加記録は, 本報告で初めて記録されるもので, 産地・採集個体数(判明している限り雌雄別も明記)・採集者名を記し, 都道府県単位で新記録の場合は+印を, 新産地には\*印を, それぞれ頭に付した. 地図上に日本産全種の既知および新産地を示した. 寄主植物に関しては, その確実な記録の最初の文献を( )内に示したが, 寄主選好性に地域性のあることを考慮し, 観察場所も判明している限り挙げるようにした. 寄主植物の記録は, 採集地で摂食を確認している場合から既知見からの判断によるものまで信憑性には程度の差があることに注意されたい. 既知産地欄には採集年月日と, 寄主植物についての観察記録がある場合はそれも記した. 地名表記は, 近年の市町村合併などで変更が著しいが, 特に混乱の恐れのない限り原報告における旧地名表記を生かした上で現在の地名表記をするようにした. 一部徹底し得なかったものがあるが, 以上は, いずれも今後の調査の参考に供するための措置と承知されたい.

#### 1. ジュウニホシニセマルトビハムシ *Schenklingia duodecimmaculata* (CHEN, 1934)

原記載: *Eucycla duodecimmaculata* CHEN, 1934, *Stylops*, **32**: 75 (Korea).

分布: 九州(清田, 1963)・西表島(cf. 滝沢, 2006); 朝鮮半島(CHEN, 1934a).

既知産地: 九州一福岡県(田川郡添田町英彦山. 11. VI. 1961; 清田, 1963), 西表島(V.; 滝沢, 2006).

寄主植物: 不明.

ノート: 朝鮮半島を基産地として記載されて以後, 日本国内では九州(福岡県英彦山)と西表島の2ヶ所のみからしか知られていない. 今後, 対馬や九州, 南西諸島の各地から発見される可能性はひじょうに高いと推測される.

#### 2. ヒラノニセマルトビハムシ *Schenklingia hiranoi* TAKIZAWA, 1982

原記載: *Schenklingia hiranoi* TAKIZAWA, 1982, *Ent. Rev. Japan*, **37**: 59, Fig. 2a. (Miyaura, Yakushima Is.).

分布: 九州(熊本県: 今坂・大塚, 1982)・屋久島(TAKIZAWA, 1982)・トカラ列島(中之島; KIMOTO, 1980)・奄美大島(木元, 1972)・沖縄本島(KATO, 1991).

既知産地: 九州一福岡県(嘉麻市嘉徳町古処山. 1. VIII. 1986; 城戸, 1986/18. III. 2007. 城戸, 2007b). 熊本県(阿蘇市阿蘇町深葉菊池溪谷. 12. IV. 1979. 台湾から記載された別種のササジマルノミハムシ[ササジニセマルトビハムシ] *S. sasajii* KIMOTO, 1970 として; 今坂・大塚, 1982—cf. 今坂, 1983)・屋久島(宮ノ浦[基産地]. 23. VIII. 1969; TAKIZAWA, 1982/宮ノ浦林道. 30-31. VII. 1982; 今坂, 1983)・トカラ列島(中之島; 26. VI. 1973. *S. sasajii* として; KIMOTO, 1980)・奄美大島(Santarôtôge [奄美市住用村三太郎峠]. 2. VII. 1966; 木元, 1972)・沖縄本島(名護市 Mt. Katsuu-dake [嘉津宇岳]. 420 m alt. 23. XII. 1989 (幼虫). マメヅタ; KATO, 1991).

寄主植物: マメヅタ *Lemmaphyllum microphyllum* PRESL (ウラボシ科 Polypodiaceae) (KATO, 1991).

ノート: 本種は, 九州(福岡・熊本)および屋久島からトカラ列島(中之島)を経て奄美大島・沖縄本島から記録されている. 大局的にはムツボシと同所的に生息しているように見えるが, おそらく寄主を異にする(ヒラノはマメヅタ, ムツボシはイワヒトデ類) ことにより共存が可能になっているものと推測される. 本種は, 地理的分布と寄主植物の共通性から, 次のトホシの代替種と見なすことができよう. 今坂・大塚(1982)は熊本県阿蘇町産の個体について(*S. sasajii* KIMOTO として), 城戸(1986, 2007b)は福岡県古処山産の個体について, いずれも屋久島産の模式標本と比べて背面の黒色紋がよく発達していることを指摘し, 城戸(2007b)はそれが九州本土産の個体に共通の特徴であるかどうか注意到している.

#### 3. トホシニセマルトビハムシ *Schenklingia kasuga* NAKANE, 1963

原記載: *Schenklingia kasuga* NAKANE, 1963, *Fragmenta Coleopterologica*, Pars 5, p. 20. (Hirakura, Mie).

分布: 本州 (三重県; NAKANE, 1963)・九州 (熊本県; 今坂・大塚, 1982).

既知産地: 本州—福島県 (相馬郡飯館村小宮 (野手上山遊歩道), 25. IX. 2006. ノキシノブ?; 斎藤, 2006)・栃木県 (塩谷郡塩谷町尚仁沢上流部, 14. VI. 1997; 佐藤・大桃・滝沢, 1998)・東京都 (西多摩郡奥多摩町稲村岩, 18. VI. 2006. タカノツメ? [ウコギ科] 葉裏/30-VII-2006. ヒメノキシノブ葉裏; 中村, 2006/西多摩郡檜原村数馬, 16. VII. 2007 & 7. X. 2007. ピロードシダ; 中村, 2007)・神奈川県 (小田原市, 19. VII. 1964; 佐藤, 1970; 足柄下郡箱根町仙石原, alt. 650 m. 20. VIII. 2006. ヒメノキシノブ; 高桑・苅部, 2006)・静岡県 (静岡市 [葵区] 諸子沢, 19. IV. 1982; 原木, 1984)・三重県 (平倉 [基産地; 津市美杉町], 14. V. 1957; NAKANE, 1963)・奈良県 (吉野郡上北山村和佐又山山葵谷, 6. VII. 1996; 水野, 2001); 九州—福岡県 (筑紫郡那珂川町九千部山, 30. III. 2003/11. III. 2006. カナクギノキ樹皮下 (ヒメノキシノブ)・同町網取, 1. V. 2006. 佐賀県 (西松浦郡有田町黒髪山龍門峽, alt. 12 m. 22. X. 2006. マメツタ; 廣川・高橋, 2007)・長崎県 (平戸市平戸島安満岳, alt. 500 m. 21. X. 2006. マメツタ; 廣川・高橋, 2007/諫早市高来町轟の滝, 9. IV. 2007/2. V. 2007. マメツタ; 今坂, 2007)・熊本県 (上益城郡山都町矢部内大臣, 21-28. V. 1978. 'トホシマルノミハムシ' として; 今坂・大塚, 1982).

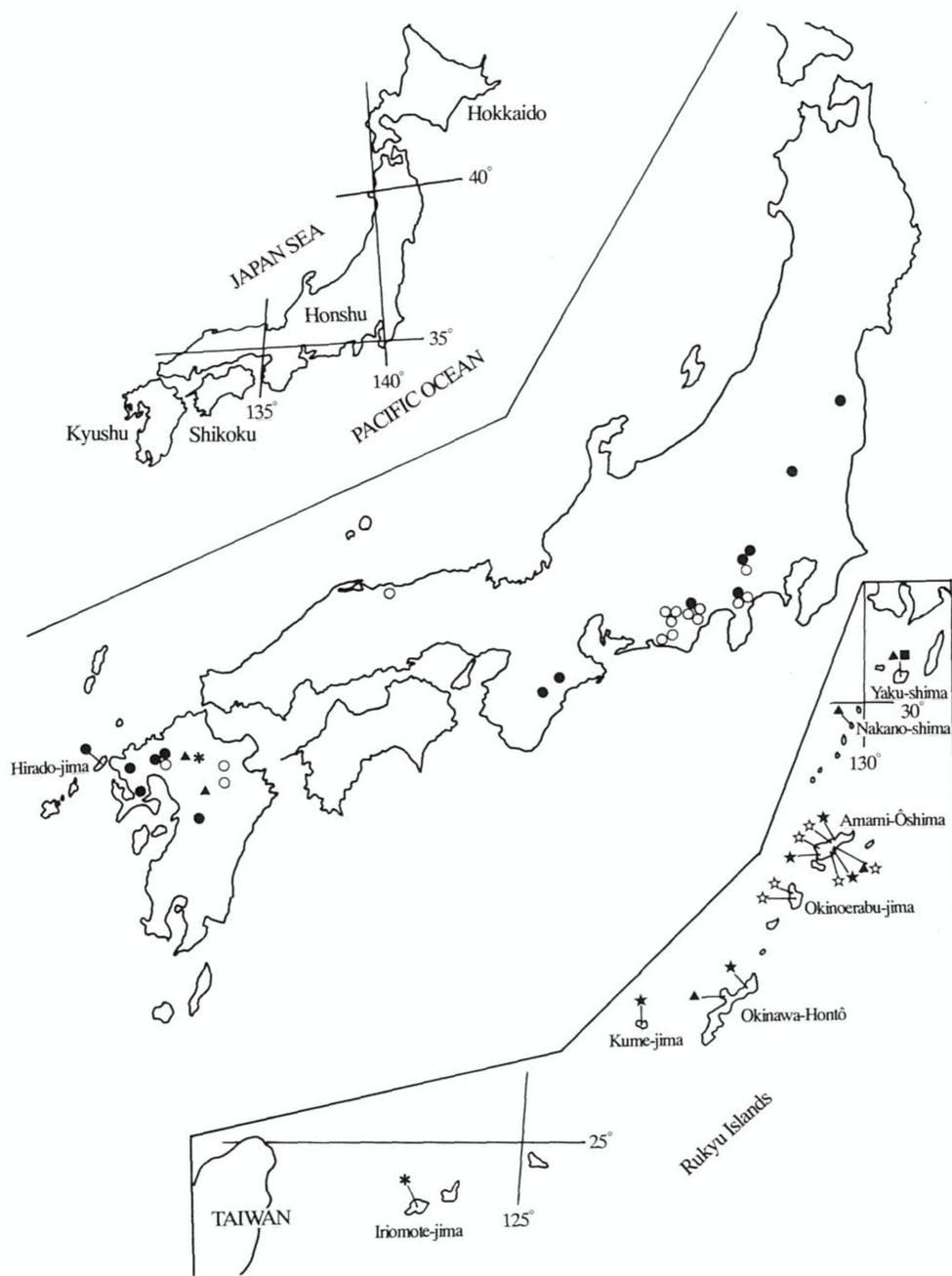
追加記録: 本州—神奈川県 (足柄下郡箱根町仙石原, 15♂♂8♀♀, 4-5. VIII. 2007. 鈴木邦雄採集. ヒメノキシノブ; 同所, 28♂♂46♀♀, 26-28. VIII. 2007. 磯輪亮太・斎藤 慎・岡田麻利採集. ヒメノキシノブ; \*箱根町大平台, 1♂1♀, 4. I. 2008. 磯輪亮太採集. 国道 1 号線沿いのコンクリート上に着生するヒメノキシノブの根裏で越冬中)・東京都 (\*あきる野市養沢, 1 ex., 4-VI-2007. 木附嘉理採集)・静岡県 (\*静岡市葵区井川閑蔵 (alt. 650 m)~西山平 (接阻峽) (alt. 740 m), 34♂♂6♀♀, 2. VIII. 2003. 多比良嘉晃・加藤 徹採集. ノキシノブ; \*静岡市葵区日向畑色 (alt. 300 m), 3♂♂6♀♀, 27. IX. 2003. 多比良嘉晃採集. ノキシノブ; \*静岡市葵区平野 (alt. 320 m), 1♂3♀♀, 29. IX. 2003. 加藤 徹採集. ノキシノブ; 静岡市葵区諸子沢 (諸子沢川起点付近) (alt. 390 m), 6♂♂4♀♀, 27. IX. 2003. 多比良嘉晃・加藤 徹採集. ノキシノブ; \*浜松市天竜区水窪町地頭方草木 (alt. 630 m), 1♂1♀, 23. IX. 2003. 加藤 徹採集. ノキシノブ; \*浜松市天竜区水窪町地頭方倉川上流 (alt. 830 m), 3♂♂, 20. X. 2003. 加藤 徹採集. ノキシノブ; \*浜松市天竜区春野町石切 (alt. 430 m), 3♀♀, 29. IV. 2004. 加藤 徹採集. ノキシノブ; \*浜松市天竜区船明大川 (alt. 70 m), 2♂♂1♀, 28. VII. 2004. 加藤 徹採集. ノキシノブ; \*浜松市天竜区青谷 (alt. 50 m), 1♂2♀♀, 10. X. 2004. 加藤 徹採集. ノキシノブ)・+鳥取県 (\*西伯郡大山町中山萩原 (alt. 430 m), 3♂♂9♀♀, 7. IX. 2007. 鈴木邦雄採集. ヒメノキシノブ)・九州—+大分県 (\*玖珠郡玖珠町黒岳, 1 ex., 20. V. 2007. 今坂正一採集. ヒメノキシノブ; \*玖珠郡九重町九酔溪, 1 ex., 20. V. 2007. 今坂正一採集. マメツタ)・佐賀県 (\*鳥栖市河内町九千部山, 1♀, 1. IV. 1996. 多比良嘉晃採集. コケ類の shifting).

寄主植物: ヒメノキシノブ *Lepisorus onoei* (Fr. et Sav.) CHING (中村, 2006)・マメツタ (廣川・高橋, 2007)・ピロードシダ *Pyrrosia linearifolia* (Hook.) CHING (中村, 2007)・ノキシノブ *Lepisorus thunbergianus* (KAULF.) CHING (本報告) (以上, いずれもウラボシ科)

ノート: 1) 地理的分布. 本種の既知産地は, 本州の 1 都 7 県, 九州の 5 県に及ぶ. 本種は, 東北地方南部から関東・東海・近畿を経て中国地方から九州にかけてのかなり広い地域に分布していることが明らかになった. 東北地方南部から三重県にかけてはやや太平洋側に偏った分布を示しているが, 栃木県下のかなり内陸部からの記録もあること, 東北地方から近畿地方にかけての内陸部や日本海側の地域の調査が不十分であることから, 今後各地から発見される可能性が高い. 北限と南限がそれぞれどこまで達しているか, 興味が持たれる. 中国地方では, 今回, 鳥取県の大山山麓から初めて記録されるが, おそらく日本海側の地域にも広く生息し, 今後全域から発見される可能性が高いと推測される. 四国は, これまで本属の種はまったく知られていないが, 本属の代置属・種は見当たらないので, おそらく発見は時間の問題であろう. 九州では, 既知産地は 5 県に及ぶが, いずれも中北部であり, 中央構造線のほぼ北側の地域に限られているように思われるが, もしも何らかの関係があるとすれば, 四国でも少なくとも中央構造線の北側の地域には分布していることを示唆するものと言えよう.

2) 体背面の斑紋パターン. 黒斑の相対的大きさには, かなりの変異が認められるが, 地理的変異を含めた変異性の解析は今後の課題である.

3) 寄主植物嗜好性. 本種は, これまでのところ, ヒメノキシノブから得られたものが圧倒的に多いが, 東京都下でピロードシダから得られたとの報告がある. 鈴木は, 富山県を中心に北陸地方や長野・岐阜両県下の各地でも本種をかなり意識的に調査を行ってきたにもかかわらず, これまでのところ本種を発見できていない. ノキシノブはかなり普遍的に見られるものの, 本種の主要な寄主であるヒメノキシノブが北陸地方ではあまり見られないことも関係していると思われる. しかし, 多比良と加藤 徹氏は, 本種を静岡県下各地でほとんどノキシノブから採集している. ノキシノブは, 本報告が初の公式記録となる. 磯輪は, 神奈川県箱根町でヒメノキシノブだけでなくノキシノブにも本種の食痕と思われるものを観察している. そこで, 2008 年 1 月, ヒメノキシノブより得た越冬個体に実験室内でノキシノブとマメツタを与えたところ, いずれも摂食することを確認した. 九州北西部 (福岡・佐賀・長崎) ではマメツタから得られているが, 大分ではヒメノキシノブで



地図 日本産ニセマルトビハムシ属4種1亜種の地理的分布。\*：ジュウニホシニセマルトビハムシの既知産地，▲：ヒラノニセマルトビハムシの既知産地，●：トホシニセマルトビハムシの既知産地，○：同新産地；★：ムツボシニセマルトビハムシ基名亜種の既知産地，☆：同新産地；■：ムツボシニセマルトビハムシ屋久島亜種の既知産地。

も見つかっているので、九州各地でもヒメノキシノブ(ヤノキシノブ)からも発見される可能性はひじょうに高いであろう。以上の4種はいずれもウラボシ科の着生シダであるが、ヒトツバ属 *Pyrosia* (ピロードシダ)、ノキシノブ属 *Lepisorus* (ノキシノブ、ヒメノキシノブ)、マメツタ属 *Lemmaphyllum* (マメツタ) の3属に属し、ヒトツバ属はヒトツバ群に、ノキシノブ属とマメツタ属はノキシノブ群に属する(岩槻編, 1992)。岩槻編(1992)によれば、日本産のウラボシ科には約50種が知られており、それらは上記3属を含めて計12属に分類されている。既知見から判断すると、上記3属4種以外にも本種が寄主として利用しているものがある可能性が高いと推測される。また、既知見から総合的に推測すると、本種の寄主植物の嗜好性には一定の地域性があるようにも思われる。今後の調査の課題である。なお、中村(2006)は、ウコギ科のタカノツメの葉裏からも得ているが、これが寄主である可能性はほとんどないであろう。

4) 生活史。本種は、野外での採集記録は4月上旬から10月下旬にまで及んでいる。3月中・下旬にヒメノキシノブやマメツタが着生している樹木の樹皮下から採集されていること(城戸, 2007a)、今回、磯輪が箱根大平台で1月上旬にヒメノキシノブの根裏から採集していることから、成虫で越冬することが確認された。各地の採集記録などから、本種は1化性である可能性が高い。越冬成虫は、暖地ではおそらく3月下旬ごろから、高地では5月以降に活動を開始するものと推測される。夏期～初秋に新成虫が出現し、一定期間の摂食活動後越冬に入ると見なすが自然であろう。KATO(1991)は、沖縄本島産のヒラノ(寄主植物: マメツタ)と屋久島産のムツボシ(屋久島亜種; 寄主植物: イワヒトデ, オオイワヒトデ)の2種について、弱齢期の生態や幼虫の形態などを報告している。それによると、両種とも幼虫は潜葉性で、幼虫も潜葉性のハムシ類の多くの種に共通して認められる特有の扁平な形態をしている。ヒラノは12月下旬に採集された幼虫が3月に、またムツボシは5月下旬に採集された幼虫が7月にそれぞれ羽化したという。詳細は不明であるが、本属の他種においても類似の生活史を持つのではないかと推測される。

#### 4a. ムツボシニセマルトビハムシ(基名亜種) *Schenklingia sauteri sauteri* (CHEN, 1934)

原記載: *Eucycla sauteri* CHEN, 1934, Ann. Soc. Ent. France, 103: 181 (Kankau, Formosa).

分布: 奄美大島(CHŪJŌ, 1957)・徳之島(本報告)・沖縄本島(KIMOTO & GRESSITT, 1966)・久米島(東・木元, 1981); 台湾(CHEN, 1934b).

既知産地: 奄美大島(Shinmura~Naka-Yakkachi(奄美市住用村新村~中役勝). 25. VII. 1955. CHŪJŌ, 1957; Yuwan[大島郡宇検村湯湾]. 5. IV. 1956; KIMOTO, 1965; Naze[名瀬市]. KIMOTO & GRESSITT, 1966)・沖縄本島(Yona[国頭郡国頭村与那]. 19. X. 1963; KIMOTO & GRESSITT, 1966)・久米島(5. XI. 1978; 東・木元, 1981).

追加記録: 奄美大島(\*奄美市住用村屋住用川ダム林道. N28°17' E129°24', 14 exs., 19. IV. 2005. 小宮義璋採集; \*住用村三太郎峠. 1 ex., 29. IV. 2006. 柘田誠一郎採集; \*大島郡大和村毛陣. 2 exs., 23. IV. 2006. 柘田誠一郎採集; \*名瀬市知名瀬知名瀬林道. 2 exs., 17. IV. 2005. 小宮義璋採集)・沖縄本島(国頭村与那琉球大学演習葉林. N26°45' E128°55', 1 ex., 5. VI. 2004. 小宮義璋採集)・+徳之島(\*鹿児島県大島郡徳之島町井之川岳. 7 exs., 7. IV. 2006. 木附嘉理採集. ホシダ; \*大島郡天城町三京. 13 exs., 8. IV. 2006. 木附嘉理採集).

寄主植物: ホシダ *Thelypteris acuminata* (HOULT.) MORTON (ヒメシダ科 *Thelypteridaceae*) (徳之島で木附が確認; 新記録).

#### 4b. ムツボシニセマルトビハムシ(屋久島亜種) *Schenklingia sauteri insularis* NAKANE, 1984

原記載: *Schenklingia sauteri insularis* NAKANE, 1984, Conservation Reports, Yakushima Wilderness Area, p. 598 (Kurio, Yakushima).

分布: 屋久島(鹿児島県; NAKANE, 1984).

既知産地: 屋久島(Kurio[基産地:] 鹿児島県熊毛郡屋久町栗生. 19. VIII. 1983; NAKANE, 1984; Segiri[熊毛郡上屋久町瀬切]. 120 m alt. 27. V. 1990(幼虫). イワヒトデ, オオイワヒトデ; KATO, 1991).

寄主植物: イワヒトデ *Colysis elliptica* (THUNB.) CHING (ウラボシ科) (KATO, 1991)・オオイワヒトデ *Colysis pothifolia* (HAMILT. ex D. DON) PRESL (ウラボシ科) (KATO, 1991).

ノート: 基名亜種は台湾から奄美諸島にまで、屋久島には屋久島亜種が分布している。前者は、木附が徳之島で、ホシダを寄主とすることが判明しているルイスコトビハムシ *Manobia lewisi* JACOBY, 1885 と共に採集した。他に、屋久島亜種と同様、ウラボシ科のイワヒトデ類も可能性が高い。なお、ホシダは、TAKIZAWA(1979)が台湾産のミワニセマルトビハムシ *S. miwai* (CHŪJŌ, 1937) の寄主として記録している。後者の寄主がイワヒトデ類であることから、屋久島を含めた南西諸島には広く生息しているものと推測される。九州中南部からは本属の種がまったく発見されていないが、既述のヒラノとともに、本種の屋久島亜種が分布している可能性がある。イワヒトデ属のシダ類は、本州中部の太平洋側の地域から南西諸島以西にまで分布する種類が多いことも、今後の調査において考慮すべきであると推測される。

ニセマルトビハムシ属の外国産の種も知られている限りシダ類を寄主としている。この属の他にも、シダ類を寄主とするハムシ類には、多くの種が知られている。それらについては、別稿(鈴木・南, 2008)を参照されたい。

### ニセマルトビハムシ属におけるテントウムシ擬態

ハムシ科の中には、テントウムシ類と酷似した体背面の斑紋パターンを持つ種が多く存在する。ニセマルトビハムシ属は、テントウムシ属 *Argopistes* などとともに、その典型的なグループの一つである。本属の、特に日本産の種の特徴的な斑紋パターンについて、擬態の観点から簡単に触れておきたい。中村(2006)と鈴木(2007)は、トホシニセマルトビハムシとゴミムシダマシ科のクロホシテントウゴミムシダマシ *Derispia maculipennis* (MARSEUL, 1876)の体背面の斑紋パターンが酷似していること、かれらがしばしば同時に採集されることを指摘している。今坂(2007)も、他にクロジュウニホシテントウ *Plotina versicolor* LEWIS, 1896, メツブテントウ *Sticholotis substrina* CROUCH, 1874, タラメツブテントウ *Sticholotis* sp. など、やはり体背面の斑紋パターンがひじょうに類似した数種のテントウムシが、トホシとほぼ同じような環境下でしばしば同時に採集されることを指摘している。ゴミムシダマシ科の多くの種は、天敵に対して忌避的に作用する化学物質(防御物質)の分泌器官を備えていることが知られている(cf. CROWSON, 1981)。実際、クロホシテントウゴミムシダマシ属 *Derispia* の種も、捕獲すると弱いながら独特の臭気を発散させる。この属には日本産からも近縁種が数種知られており、いずれも類似の斑紋パターンを持つ。すなわち、かれらは、テントウムシ類と互いにミューラー型擬態 Müllerian mimicry の関係にあると考えられる。それゆえ、ニセマルトビハムシ属の種は、テントウムシ類とクロホシテントウゴミムシダマシ属にベイツ型擬態 Batesian mimicry の1タイプであるテントウムシ擬態をしているものと見なすことができる。ニセマルトビハムシ属の種は、日本産の種に限ってもトホシだけでなく、ジュウニホシやメツブシなど、種によって背面の斑紋パターンが多様であり、しかもそれぞれの種に酷似したテントウムシが実在する。ニセマルトビハムシ属の各種の生息環境下に、かれらのモデル model となるテントウムシ類やクロホシテントウゴミムシダマシ属の種が共存している状況は、おそらく普遍的に存在しているのではないかと推測される。ニセマルトビハムシ属を探索する際、寄主植物であるウラボシ科の着生シダ類とともにクロホシテントウゴミムシダマシ属の種の生息の有無も、有力な手がかりになるであろう。今後、群集生態学 community ecology の観点からも考究されるべき興味ある研究課題である。

### 引用文献

- 東 清二・木元新作, 1981. 沖縄の離島のハムシ類目録(資料). 琉球大学農学部学術報告, (28): 49-55. [ムツボシ基名亜種: 久米島初記録]
- BALY, J., 1876. Description of new genera and species of Halticinae. *Trans. ent. Soc.*, 1876: 433-449. [*Schenklingia* 属の旧名 *Eucycla* の記載]
- CHEN, S. H., 1934a. On some species of Chrysomelidae (Col.) in the British Museum. *Stylops*, 3: 66-78. [ジュウニホシ: 原記載/基産地: Korea]
- CHEN, S. H., 1934b. Coleopteres Halticinae recueillis par M. H. SAUTER a Formose. *Ann. Soc. Ent. France*, 103: 175-185. [ムツボシ基名亜種: 原記載/基産地: Kankau, 台湾]
- CHŪJŌ, M., 1957. Chrysomelid-beetles of Loo-Choo Archipelago (IV). *Mem. Fac. Lib. Arts & Educ., Kagawa Univ.*, II (52): 1-8. [ムツボシ基名亜種: 奄美大島初記録]
- CHŪJŌ, M. & S. KIMOTO, 1961. Systematic catalog of Japanese Chrysomelidae (Coleoptera). *Pacific Insects*, 3: 117-202. [ムツボシ: *Schenklingia* 属の基和名を 'クロホシトビハムシ', 本種の和名を 'ムツボシトビハムシ' とした]
- CROWSON, R. E., 1981. *The Biology of Coleoptera*. xii+802 pp. Academic Press, London/Orlando.
- 原本直美, 1984. トホシマルノミハムシの採集例. 静岡の甲虫, (2): 59. [静岡県初記録]
- HEIKERTINGER, F. & Csiki, E., 1940. *Coleopterorum Catalogus auspiciis et auxilio W. JUNK editus a S. SCHENKLING*. Pars 169: Chrysomelidae: Halticinae II. pp. 337-635. Uitgeverij Dr. W. JUNK's-Gravenhage. [*Eucycla* 属に対する新名 *Schenklingia* の設立]
- 廣川典範・高橋隆信, 2007. 佐賀・長崎のトホシニセマルトビハムシはマメツタに付く. 月刊むし, (432): 32-33. [佐賀・長崎両県初記録. 寄主: マメツタ初記録]
- 今坂正一, 1983. ヒラノマルノミハムシの追加記録. 月刊むし, (149): 33. [屋久島追加記録; 今坂・大塚(1982)が *S. sasajii* KIMOTO として熊本県より記録したものをヒラノの誤りと訂正]
- 今坂正一, 2007. 2001年以降に長崎県多良山系で採集した甲虫一幹掃き採集など新しい採集法の紹介をかねて. こがねむし(長崎昆虫研究会会報), (72): 7-17. [トホシ: 長崎県追加記録. 寄主: マメツタ]
- 今坂正一・大塚 勲, 1982. 日本未記録のハムシについて. 北九州の昆虫, 29: 120. [ヒラノ: 熊本県より日本初記録. ササジマルノミハムシ *S. sasajii* KIMOTO として; トホシ: 熊本県より九州初記録. トホシマルノミハムシとして]
- 岩槻邦男編, 1992. 『日本の野生植物 シダ』. vii+311 pp., 196 Pls. 平凡社, 東京.
- KATO, M., 1991. Leaf-mining chrysomelids reared from Pteridophytes. *Jpn. J. Ent.*, 59: 671-674. [ヒラノ: 沖縄本島初記録. 寄主: マメツタ初記録; ムツボシ屋久島亜種: 屋久島追加記録. 寄主: イワヒトデとオオイワヒトデ初記録; 両種の

- 生活史と幼虫形態に関する報告]
- 城戸克弥, 1986. 福岡県未記録のハムシ 2 種の採集例. 北九州の昆蟲, **33**(3): 156. [ヒラノ: 福岡県初記録]
- 城戸克弥, 2007a. 生きた樹木の樹皮下からトホシニセマルトビハムシを採集. 月刊むし, (432): 41. [福岡県初記録. カナクギノキ樹皮下 (ヒメノキシノブ)・ムクノキ樹皮下 (マメツバ)]
- 城戸克弥, 2007b. カナクギノ木の樹皮下から得られたヒラノニセマルトビハムシ. 月刊むし, (437): 52-53. [福岡県追加記録]
- KIMOTO, S., 1965. The Chrysomelidae of Japan and the Ryukyu Islands. IX. Subfamily Alticinae II. *J. Fac. Agr., Kyushu Univ.*, **13**: 431-459. [ムツボシ基名亜種: 奄美大島追加記録]
- KIMOTO, S., 1970. Notes on the Chrysomelidae from Taiwan V. *Kontyû, Tokyo*, **38**: 292-313. [台湾より 2 新種 (*S. sasajii*, *S. saigusai*) を記載, 1 未記録種 (*S. ornatipennis* (CHEN, 1933)) を記録]
- 木元新作, 1972. 九州大学農学部付属彦山生物学実験所蔵の金花虫類 (昆虫綱, 鞘翅目) 標本について II. 久留米大学論叢, **20**: 1-16. [ヒラノ: 奄美大島初記録. *S. sasajii* KIMOTO として]
- KIMOTO, S., 1980. Catalogs of the Chrysomelidae of Tokara Is., Kikaigashima and Okierabujima in the Ryukyu Archipelago. *Kurume Univ. Jour.*, **29**: 153-159. [ヒラノ: トカラ (中之島) 初記録. *S. sasajii* として]
- 木元新作, 1984. ハムシ科. 林 匡夫・森本 桂・木元新作編『原色日本甲虫図鑑 IV』(VII: 438 pp., 72 Pls.): 147-222, Pls. 29-43. 保育社, 大阪. [ムツボシとヒラノを図説. トホシとジュウニホシを概説]
- 木元新作, 1994. 成虫篇. 木元新作・滝沢春雄, 1994. 『日本産ハムシ類幼虫・成虫分類図説』(xvii+539 pp. 133 Pls.): 1-364, Pls. 1-88. 東海大学出版会, 東京. [ムツボシとヒラノを図説. トホシとジュウニホシを概説]
- KIMOTO, S. & J. L. GRESSITT, 1966. The Chrysomelidae of the Ryukyu Archipelago. *Pacific Insects*, **8**: 467-577. [ムツボシ基名亜種: 沖縄本島初記録]
- 清田正則, 1963. 障子岳と深倉峽の鞘翅目目録 I ハムシ科. 北九州の昆蟲, **10**: 58-66. [ジュウニホシ: 福岡県より日本初記録]
- 水野弘造, 2001. 水野弘造自力採集甲虫目録 (1951-2001). 水野弘造の 20 世紀甲虫誌一虫寿記念一. 関西甲虫談話会資料, (18): 61-143. [トホシ: 奈良県初記録; 日本甲虫学会編, 2007. 和佐又山産甲虫類目録. 地域甲虫自然史, (3): 114+3 pp. より引用]
- 中村裕之, 2006. トホシニセマルトビハムシ物語~寄主植物がわかるまで~. 月刊むし, (429): 14-17. [東京都初記録. タカノツメ葉裏? とヒメノキシノブ葉裏より採集]
- 中村裕之, 2007. トホシニセマルトビハムシをピロウドシダから採集. 月刊むし, (442): 33. [東京都追加記録. 寄主: ピロウドシダ初記録]
- 中根猛彦, 1963. ハムシ科. 中根猛彦・大林一夫・野村 鎮・黒澤良彦『原色昆虫大図鑑 II (甲虫篇)』(18+443 pp., 192 Pls.): 320-348, Pls. 160-174. 北隆館, 東京. [トホシ: 'トホシマルノミハムシ' として図説]
- NAKANE, T., 1963. New or little-known Coleoptera from Japan and its adjacent regions. XVI. *Fragmenta Coleopterologica*, (4): 18(5): 19-20. [トホシ: 原記載, p. 20. 基産地: 三重県平倉]
- 中根猛彦, 1984. 屋久島に産する甲虫類について. 環境庁自然保護局編『屋久島の自然 (屋久島原生自然環境保全地域調査報告書)』(11+714 pp.): 587-631. (英文新種記載: pp. 596-598) [ムツボシ屋久島亜種原記載, p. 598. 基産地: 屋久島 [Kurio 栗生]]
- 大野正男, 1971. 日本産ハムシ科名彙. 東洋大学紀要教養課程篇 (自然科学), (13): 31-126. [*Schenklingia* 属の基和名 'ニセマルトビハムシ' を提唱]
- 斎藤修司, 2006. トホシニセマルトビハムシの阿武隈山地北部での記録. 月刊むし, (430): 17-18. [福岡県初記録. 寄主: ノキシノブ?]
- 佐藤勝信, 1970. トホシマルノミハムシ小田原で採集. 神奈川虫報, (32): 301. [神奈川県初記録. cf. 平野幸彦 (2004) コウチュウ目. 神奈川昆虫談話会編『神奈川県昆虫誌 II』(pp. 315-836), pp. 335-835]
- 佐藤光一・大桃定洋・滝沢春雄, 1998. 栃木県産甲虫分布資料 (7). インセクト, 49: 4-14. [トホシ栃木県初記録]
- 鈴木邦雄, 2007. 小宮義璋さんの逝去を悼む. 月刊むし, (429): 40-42. [トホシ: クロホシテントウゴミムシダマシと体背面の斑紋パターンが酷似していることを指摘]
- 鈴木邦雄・南 雅之, 2008. シダ類を寄主とするハムシ類 (概説). 甲虫ニュース, (161): 29-33.
- 鈴木邦雄・滝沢春雄, 2007. ハムシ科. 森本 桂監修『新訂 原色昆虫大図鑑 II (甲虫篇)』(32+52 pp., 196 Pls.): 369-402, Pls. 163-177. 北隆館, 東京. [トホシ: 'トホシニセマルトビハムシ' として図説]
- 高桑正敏・菊部治紀, 2006. 神奈川県箱根におけるトホシニセマルトビハムシの寄主植物とその発見の経緯. 月刊むし, (429): 17-18. [神奈川県追加記録. 寄主: ヒメノキシノブ]
- TAKIZAWA, H., 1979. Notes on Taiwanese Chrysomelidae. III. *Kontyû, Tokyo*, **47**: 340-351. [台湾産ミワニセマルトビハムシ *Schenklingia miwai* (CHCJÖ, 1937) の寄主としてホシダを記録]
- TAKIZAWA, H., 1982. Notes on Japanese Chrysomelidae (Coleoptera). *Ent. Rev. Japan*, **37**: 55-60. [ヒラノ: 原記載. 基産地: 屋久島宮ノ浦]
- 滝沢春雄, 1994. 木元新作・滝沢春雄, 1994. 『日本産ハムシ類幼虫・成虫分類図説』(xvii+539 pp., 133 Pls.): 365-513, Pls. 89-133. 東海大学出版会, 東京. [ムツボシ・ヒラノ: KATO, 1991 に基づいて幼虫を図説]
- 滝沢春雄, 2006. トホシニセマルトビハムシとその仲間. 月刊むし, (429): 19. [日本産ニセマルトビハムシ属 4 種の解説]

追記 校正中にトホシの三重県下の既知産地に追加されるべき次の記録を知った: 乙部 宏, 2007. 大紀町と大台町でトホシニセマルトビハムシを採集. ひらくら, **51**(6): 93. 三重県下の産地としては, 基産地である平倉 (津市美杉町) のみが知られていた. 追加既知産地: 度会郡大紀町南亦山. 5. VIII. 2007; 多気郡大台町総門山. 23. IV. 2007. いずれもヒメノキシノブから

採集された。この報文の存在をご教示いただいた月刊むし社の中村裕之氏に感謝する。

(鈴木: 930-8555 富山市五福 3190 富山大学大学院理工学研究部生物学教室, 南: 180-0004 東京都武蔵野市吉祥寺本町 3-17-7, 今坂: 830-0037 久留米市諏訪野町 1736-3, 多比良: 静岡市駿河区高松 2-7-1 キャロットハウス 405, 木附: 192-0912 東京都八王子市絹ヶ丘 1-33-9, 磯輪: 234-0034 神奈川県厚木市船子 1737 東京農業大学昆虫学研究室)

## シダ類を寄主とするハムシ類 (概説)

鈴木邦雄・南 雅之

### Chrysomelid-beetles feeding on ferns

Kunio SUZUKI and Masayuki MINAMI

#### はじめに

筆者らは、最近、シダ類を寄主とするトビハムシ亜科 Alticinae のニセマルトビハムシ属 *Schenklingia* CSIKI et HEIKERTINGER, 1940 の日本産 4 種 1 亜種について、主に既知の産地や寄主に関する情報を取りまとめると共に、未公表の多くの知見を報告した(鈴木ら, 2008)。この属の種は、いずれも稀種とみなされてきたが、最近、そのうちの 1 種であるトホシニセマルトビハムシがウラボシ科の着生シダ類を寄主としていることが明らかになったのを契機として、各地から発見されるようになってきた。

従来、シダ類を寄主とするハムシ類については、あまり関心が払われてこなかったように思われる。そのため、地理的分布や寄主植物といった基本的な情報の蓄積が乏しい。筆者らは、シダ類を寄主としているハムシ類に関する文献を渉猟し、ニセマルトビハムシ属の種以外にも多くの種がシダ類を利用していることを知り得たので、この機会にそれらの知見を取りまとめておきたい。

本稿をまとめるにあたり、ご助力をいただいた次の方々々に深謝する: 故中條道夫博士, D. G. FURTH 博士, 平野幸彦氏, 今坂正一博士, 加藤 真博士, 木元新作博士, 木附嘉理氏, 故小宮義璋博士, A. S. KONSTANTINOV 博士, 西原昇吾博士, A. G. SAMUELSON 博士, R. E. WHITE 博士, 滝沢春雄博士。

#### シダ類を寄主とするハムシ類

##### 1. ニセマルトビハムシ属 *Schenklingia*

極東地域から東南アジア一帯・ミクロネシアにかけて広く分布し、シダ類を寄主とする代表的な属。これまでに約 30 種が知られ、日本には次の 4 種 1 亜種が知られているが、各種の地理的分布その他についての既知の詳細は、筆者らの別稿を参照されたい(鈴木ら, 2008)。ヒラノニセマルトビハムシ *S. hiranoi* TAKIZAWA, 1982 はマメツタ *Lemmaphyllum microphyllum* PRESL を、トホシニセマルトビハムシ *S. kasuga* NAKANE, 1963 はヒメノキシノブ *Lepisorus onoeti* (FR. et SAV.) CHING・ノキシノブ *L. thunbergianus* (KAULF.) CHING・マメツタ・ピロードシダ *Pyrrosia linearifolia* (HOOK.) CHING を、ムツボシニセマルトビハムシ基名亜種 *S. sauteri sauteri* (CHEN, 1934) はホシダ *Thelypteris acuminata* (HOULT.) MORTON (ヒメシダ科 Thelypteridaceae) を、ムツボシニセマルトビハムシ屋久島亜種 *S. sauteri insularis* NAKANE, 1984 はイワヒトデ *Colysis elliptica* (THUNB.) CHING・オオイワヒトデ *C. pothifolia* (HAMILT. ex D. DON) PRESL を、それぞれ寄主とすることが判明している。以上のシダ類のうち、ホシダを除く種は、いずれもウラボシ科 Polypodiaceae に属する。ムツボシニセマルトビハムシの基名亜種は、屋久島亜種同様、イワヒトデ類も寄主としている可能性が高い。ジュウニホシニセマルトビハムシ *S. duodecimmaculata* (CHEN, 1934) の寄主も判明していないが、他種と同様、ウラボシ科のシダ類である可能性が高い。なお、KATO (1991) は、沖縄本島産のヒラノニセマルトビハムシとムツボシニセマルトビハムシ屋久島亜種について、弱齢期の生態や幼虫の形態などを報告している。ニセマルトビハムシ属の外国産の種の寄主植物に関しては、数人の研究者が報告している。SAMUELSON (1973) は、マラヤ産の *S. biplagiata* (BRYANT, 1948) の成虫がツルシダ科 Oleandraceae のホウビカンジュ *Nephrolepis biserrata* (Sw.) SCHOTT を寄主にしていること (BRYANT, 1948 を引用)、Ponape 島産の *S. esakii* CHŪJŌ, 1943 がシダの葉柄 petiole と関係を持つこと (標本ラベルに基づく)、オーストラリア産の *Halticorcus platycerii* LEA, 1917 (*Halticorcus* は *Schenklingia* にごく近縁の属で、後者のシノニムである可能性を示唆) の幼・成虫がビカクシダ *Platycerium grande* J. SM. (staghorn fern) (ウラボシ科) と関係を持つこと (LEA, 1917 を引用) を記している。TAKIZAWA (1979) は、台湾産のミワニセマルトビハムシ *S. miwai* (CHŪJŌ, 1937) の寄主としてホシダを記録した。MOHAMEDSAID (2004) は、マラヤ産の *S. biplagiata* (BRYANT, 1948) の寄主としてウラボシ科 Gleicheniaceae のコシダ *Dicranopteris linearis* (BURM. fil.) UNDERW. を挙げた (D.

*linearis* var. *linearis* として), SAMUELSON (1973) が引用している上述の BRYANT (1948) の報告を勘案すると, *S. biplagiata* は, 2 科のシダ類を寄主としていることとなる。最近, PATRA & BERA (2007) は, インドのガンジス平野で, *S. bhaumiki* BASU et SENGUPTA, 1981 が次の 5 科 9 属 10 種の多様なシダ類を寄主していると報告している (主に岩根編 (1992) などで調べ得た限りを記す): イヌケホシダ *Thelypteris dentata* (Forsk.) St. JOHN (*Christella dentata* として), ヒメシダ属の 1 種 *Thelypteris* sp. (*Cyclosorus* sp. として), *Ampelopteris prolifera* (以上 3 種はヒメシダ科), ホウライシダ属の 1 種 *Adiantum philippense* (ホウライシダ科 Parkeriaceae), モエジマシダ *Pteris vittata* L. (イノモトソウ科 Pteridaceae), タマシダ *Nephrolepis cordifolia* (L.) PRESL, ポストンタマシダ *N. exaltata* (L.) SCHOTT (以上 2 種はツルシダ科), ヒトツバマメヅタ *Pyrrosia adnascens* (SW.) CHING, ハカマウラボシ属の 1 種 *Drynaria propinqua*, オキナワウラボシ *Phymatosorus scolopendria* (BURM.) PICHÉ SERMOLLI (以上 3 種はウラボシ科)。以上の報告は, 本属の日本産種の寄主植物について考究する上で大いに参考になるであろう。ニセマルトビハムシ類は, 判明している限り, 成虫は葉を削り取るように摂食 (scraping feeding; PATRA & BERA, 2007) し, 幼虫は潜葉性である。食性の範囲は, 調査が進めば, かなり限定されていると推測される単食性 monophagy あるいは狭食性 oligophagy の種からひょうに広食性 polyphagy の種まで, 生活環を決定づける生息地の植生環境などの違いを反映して種によって多様な様相を示すに違いない。また, 特に東南アジアからインド亜大陸などにはまだ多くの未記載種が生息しているものと推測される。

## 2. シダ類を寄主とするその他のハムシ類

シダ類を寄主としているハムシ類には, 筆者らがこれまでに主に文献調査によって知り得た限りでも, 5 亜科に属するかなり多くの属や種が含まれる。JOLIVET & HAWKESWOOD (1995) は, ハムシ類の全般にわたって広範な文献調査を行い, 既知の寄主植物をハムシ科の各分類群 (主に亜科や属レベル) ごとに列挙するとともに, 植物の高次分類群ごとにそれらを寄主とするハムシ類を主に属レベルで取りまとめている。彼らによると, ハムシ科の種で寄主の判明しているのは, 全体の約 20% に過ぎず, しかも誤認や誤同定に基づく記録も少なくないという。彼らの著作は, ひょうに有用ではあるが, 残念ながら必ずしも出典が明記されていない。以下, シダ類を寄主とすることが判明しているその他のハムシ類について, 主に亜科ごとに概観しておく。

### 2a. 日本産の種群

トビハムシ亜科 Alticinae: シダ類を寄主とする日本産のハムシ類は, 公式な記録上はほとんどトビハムシ亜科に限られる。木元 (1979) は, ルイスコトビハムシ *Manobia lewisi* JACOBY, 1885 が沖縄本島でホシダ (ヒメシダ科) についているのを観察している。木附嘉理氏 (私信) も, 徳之島でムツボシニセマルトビハムシの基名亜種とともにホシダから本種を採集しておられる。セマルトビハムシ *Minota nigropicea* (BALY, 1874) も, シダ類を寄主としていることが知られている。木元 (1984) は, ワラビ *Pteridium aquilinum* (L.) KUHN var. *latiusculum* (DESV.) UNDERS. ex. HELL. (コバノイシカゲマ科), ベニシダ *Dryopteris erythrosora* (EATON) O. Ktze. およびヤブソテツ *Cyrtomium fortunei* J. SM. (以上 2 種はオシダ科 Dryopteridaceae) を挙げ, 新井 (2005) は, 埼玉県下でクサソテツ *Matteuccia struthiopteris* (L.) TODARO から得たと報告している。鈴木・滝沢 (2007) は, 単に「シダ類」を挙げている。また, 今坂正一氏 (私信) は, マメヅタ葉上で, 既述のトホシニセマルトビハムシと共に本種を複数個体採集し, 後者はマメヅタも食草としている可能性があるとして推測しておられる。全北区に分布するアカガネトビハムシ属 *Hippuriphila* (トビハムシ亜科) は, スギナ *Equisetum arvense* L. (トクサ科 Equisetaceae) につくという (MEDVEDEV & ZAITSEV, 1978—滝沢, 1994 による; MEDVEDEV & ROGINSKAJA, 1988—KONSTANTINOV & VANDENBERG, 1996 による) が, 日本に分布するアカガネトビハムシ *H. babai* (CHŪJŌ, 1959) では確認されていないと思われる (ニューヨークでは, タデ科 Polygonaceae のギシギシ属 *Rumex* にもつくという記録がある)。なお, スギナは, ナガトビハムシ *Liprus punctatos-triatus* MOTSCHULSKY, 1860 の寄主ともされ (CHŪJŌ & KIMOTO, 1961), しばしば重要な文献 (GRESSITT & KIMOTO, 1963; KONSTANTINOV & VANDENBERG, 1996 など) 中で引用されてきたが, まず確実に誤記録に基づくものであると考えられる。なお, GRESSITT & KIMOTO (1963) は, *Manobia* 属の寄主にエノキグサ属 *Acalypha* の 1 種 (トウダイグサ科 Euphorbiaceae) を挙げており, 南も富士山麓でクロコトビハムシ *M. parvula* (BALY, 1874) を同じトウダイグサ科のコンシキソウ *Euphorbia supina* RAFIN. から得ている。KONSTANTINOV & VANDENBERG (1996) は, *Minota* 属の寄主に HEIKERTINGER (1959) を引いてスノキ属の 1 種 *Vaccinium myrtillus* L. (ツツジ科 Ericaceae) を挙げている。植食性昆虫には, しばしば系統的にかなり遠縁の植物を寄主としている種が見られる。*Manobia* と *Minota* の 2 属は, 属レベルでそうした分断狭食性 disjunct oligophagy (cf. BERNAYS & CHAPMAN, 1994) を示す例であると言えよう。

ネクイハムシ亜科 Donaciinae: 小宮 (2004) は, キヌツヤネクイハムシ *Plateumaris sericea* (LINNAEUS, 1768) (ネクイハムシ亜科 Donaciinae) の成虫が, 群馬県草津白根山弓ヶ池湿原 (標高約 2,010 m) で, ヤマドリゼンマイ *Osmunda cinnamomea* L. (ゼンマイ科 Osmundaceae) の孢子葉に多数集まっているのを観察し, その孢子が栄養源になっている可能性を示唆している。花粉を食物資源として利用しているハムシ類は, 少なくない (cf. SAMUELSON, 1994)。ネクイハムシ類の成虫は, 多くのスゲ科植物や顕花植物に訪花するが, 小

宮の観察は、ネクイハムシ類はもとより、他の訪花性の花粉食のハムシ類が、状況（特に活動期の食物資源が枯渇したような時や、個体群密度が高く、生息地に寄主以外の植物の花が豊富に見られるような時）によってはシダ類の胞子も利用している可能性を強く示唆しており、今後、大いに注意が払われるべきであろう。

サルハムシ亜科 Eumolpinae: 鈴木は、2007年8月、神奈川県箱根町仙石原の数ヶ所で、ヒメノキシノブ類から、キカサハラハムシ *Xanthonia placida* BALY, 1874 (サルハムシ亜科 Eumolpinae) を複数個体得ているが、確実に寄主としているかどうかは確認し得なかった。

#### 2b. 外国産の種群

(1) クビナガハムシ亜科 Criocerinae: HENDRIX (1980) は、*Lema concolor* LEE を挙げている（この種は、WHITE (1993) によると命名者は LECONTE, 1884 のようであり、*Oulema* に移された。彼によれば、本種は、ワラビ brake fern (コバノイシカグマ科 Dennstaedtiaceae) などのシダ類を摂食することを COCKERELL (1902) が、また高地でシダを摂食することを PALLISTER (1953) がそれぞれ報告しているという）。

(2) サルハムシ亜科 Eumolpinae: HENDRIX (1980) は、本亜科を挙げているが、具体的な種は挙げておらず、筆者らも特定できなかった。

(3) ヒゲナガハムシ亜科 Galerucinae: HENDRIX (1980) は、本亜科にもシダ類を寄主とする種があることを挙げているが、やはり種名は挙げていない。JOLIVET & HAWKESWOOD (1995) によれば、タイ産の *Galerucella birmanica* JACOBY (ヒゲナガハムシ亜科) は、コウホネ属 *Nuphar* やヒツジグサ属 *Nymphaea* (いずれもスイレン科 Nymphaeaceae) につぐが、水生シダであるサンショウモ属 *Salvinia* (サンショウモ科 Salviniaceae) から採集されるという。

(4) トビハムシ亜科 Alticinae: SAMUELSON (1971) は、ニューギニアのトビハムシ亜科の報告の中で、*Setsaltica* 属の *S. cyatheae* SAMUELSON, 1971 と *S. eumolpiformis* SAMUELSON, 1971 を記載すると共に、寄主としてヘゴ属の1種 *Cyathea muelleri* (ヘゴ科 Cyatheaceae) を記録した。SAMUELSON (1973) は、オセアニアのトビハムシ亜科のモノグラフの中で、多くの文献記録も含め、次のようなシダを寄主とする多くの属と種を挙げている（種名の後に寄主を( )内に示す): *Febra venusta* CLARK, 1864 (タマシダ属の1種 *Nephrolepis* sp. ツルシダ科; BRYANT & GRESSITT, 1957), *F. ovata* BRYANT, 1936 (リュウビンタイ属の1種 *Angiopteris evecta*. リュウビンタイ科 Marattiaceae; BRYANT, 1936), *F. insularis* BRYANT, 1925 (ミモチシダ *Acrostichum aureum* L. イノモトソウ科; BRYANT & GRESSITT, 1957), *F. nigroornata nigroornata* BRYANT, 1957 (シダ), *Manobia fuscitarsis* (LEA, 1926) (シダ), *M. instabilis* (LEA, 1926) (シダ, 木生シダ), *Alema paradoxa* SHARP, 1876 (ヘゴ属の1種 *Cyathea dealbata* (FORST.) SW. ヘゴ科; SHARP, 1876). SAMUELSON (1984) は、ニューギニアのトビハムシ亜科の報告の中で、次の数種の寄主を記録している: *Setsaltica cyatheae* SAMUELSON, 1971 (ヘゴ属の1種 *Cyathea muelleri*); *Manobia cyatroxae* SAMUELSON, 1984 (ヘゴ属の1種 *Cyathea atrox*), *M. hirashimai* SAMUELSON, 1984 (シダ), *M. monilis* SAMUELSON, 1984 (ヘゴ属の1種 *Cyathea atrox*). BALICK ら (1978) は、シダ類を食うハムシとして、トビハムシ亜科のツブトビハムシ属 *Aphthona* の1種とコトビハムシ属 *Manobia* の2種を挙げている (KIRK, 1977 を引用). KONSTANTINOV & VANDENBERG (1996) は、MEDVEDEV & ROGINSKAJA (1988) などに基いて *Novofoudrasia rufiventris* WEISE, の寄主としてヤナギ類 *Salix* spp. の他にやはりスギナを引いているが、疑わしいと指摘している。JOLIVET & HAWKESWOOD (1995) は、ハムシ科が選好する寄主をとりまとめている第3章で、維管束隠花植物 Vascular cryptogams を寄主として利用しているハムシ類について述べている。ここでは、既述に漏れているもの(出典が不明なものもある)を挙げておきたい。西インド諸島産の *Exocerus* 属はホウライシダ属 *Adiantum* (ホウライシダ科) につくという。 *Distigmoptera* 属も、やはり水生シダのアカウキクサ属 *Azolla* (アカウキクサ科 Azollaceae) から採集されるという。フロリダ産の *Pseudolampsis guttata* (LECONTE) も、アカウキクサ属の1種 *A. caroliniana* につくという。

以上、概観してきたように、シダ類を寄主として利用しているハムシ類は、ネクイハムシ・クビナガハムシ・サルハムシ・ヒゲナガハムシ・トビハムシの5亜科に及んでいるが、トビハムシ亜科にはシダ類を主な寄主にしていない属や種が、特に極東や南太平洋地域の島嶼にかなり見られる。JOLIVET & HAWKESWOOD (1995) は、山岳地帯に生息する種によるシダ類の利用は、他に適当な寄主植物がないことによる二次的な適応であることは確実だと指摘している。PATRA & BERA (2007) は、シダ類を食物資源として利用しているニセマルトビハムシ属のような植食性昆虫と、彼らに対抗するシダ類の化学防御 chemical defence の関係に注目している。シダ類は、被子植物に比べると植食性昆虫の食物資源としての利用度は低いと考えられがちであるが、トビハムシ類のいくつかの属のように、これらの植物にひじょうによく適応している群がある。日本産ハムシ類については、従来シダ類との関係はあまり調査されてはこなかったが、今後各地で意識的な調査の行われることを期待したい。

#### 植食性昆虫類と寄主植物の相互作用

シダ類を寄主としているハムシ類に限らず、植食性昆虫類と寄主植物の相互関係は、しばしばきわめて多様で複雑な様相を示す。ここで、この問題についてごく簡単に触れておきたい。

各生息地における寄主植物を正確に把握することが、議論の前提かつ基礎として、第一に必要となる。特に広食性の種ほど、問題状況は複雑である。たとえば、寄主としうる植物が生育しているからといって、その植物をその場所で実際に寄主として利用しているとは限らない。その場所では、まったく異なる植物を寄主としているようなことはしばしば見られる。このような事例を、鈴木らは富山県下を中心とする北陸地方において、ハムシ類やオトシブミ科 Attelabidae のいくつかの広食性の種で観察している (e.g., 鈴木・上原, 1998; SUZUKI & MATSUMURA, 2006; 鈴木ら, 2006)。異なる地域であっても同じ寄主を利用している場合は一般的には特に問題になることは少ないが、異なる寄主を利用している場合、あるいは同じ地域でも寄主として潜在的に利用可能である植物種が複数生育していたり、実際に複数の寄主を利用している場合、問題は単純ではない。ある地域の個体群がその地域で特定の植物を寄主として特定の様式で生活環に取り入れていることには、当然のことながら歴史的な背景が横たわっている。生活に関わる諸条件が同等に保障されている環境下であれば、異なる地域でも基本的に同じ生活環を採ることが可能であるが、地域が異なればそれぞれの種の生活を支配する諸環境条件に一定の違いのあることは当然であり、その結果として生活環の諸側面に種々の分化が生じてきている可能性があり、寄主植物に対する選好性はその象徴的な現象であると言える。本稿で取り上げたニセマルトビハムシ属の種についても、これまでに得られた知見のみからもかなり多様な問題状況が存在することが推測されるであろう。

BALICK ら (1978) は、広範な文献調査によってシダ類を食べる節足動物 420 種をとりまとめている。彼らによれば、それらの大半は昆虫で、鞘翅目、膜翅目、鱗翅目、および半翅目の種が大多数を占めている。また、彼らによれば、根を食うもの root feeders (3.3%), 胞子を食うもの spore feeders (2.4%), 潜葉性/茎穿孔性のもの miners/borers (5.9%), えい gall を作るもの gall formers (4.3%), 腐朽物を食べるもの decay feeders (4.0%) などがあり、全体の 73% の種がシダ類に依存しており、残りの 27% の種が広食性または狭食性であるという。彼らは、シダ類を食べる種には、たとえば膜翅類中では原始的なハバチ類や進化の進んだ鱗翅類が見られることから、被子植物の放射 radiation 前後に、シダ類特有の化学成分と関係して特殊な共進化を遂げてきたのであろうと推測している。

## 引用文献

- [日本産ニセマルトビハムシ属の地理的分布と寄主植物に関する文献については、鈴木ら (2008) を参照されたい]  
 新井浩二, 2005. セマルトビハムシをクサソテツ (コゴミ) より採集. 寄せ蛾記, (118): 24.  
 BALICK, M. J., D. G. FURTH, & G. COOPER-DRIVER, 1978. Biochemical and evolutionary aspects of arthropod predation on ferns. *Oecologia* (Berl.), **35**: 55-89. [シダ類を摂食する節足動物の生化学的・進化学的考察]  
 BERNAYS, E. A. & R. F. CHAPMAN, 1994. Host-plant Selection by Phytophagous Insects. xiii+312 pp. Chapman & Hall, Inc., New York.  
 CHŪJŌ, M. & S. KIMOTO, 1961. Systematic catalog of Japanese Chrysomelidae (Coleoptera). *Pacific Insects*, **3**: 117-202. [日本産ハムシ類の分類カタログ]  
 GRESSITT, J. L. & S. KIMOTO, 1963. The Chrysomellidae (Coleopt.) of China and Korea, Part 2. *Pacific Insects Monograph*, **1B**: 301-1026. [中国と朝鮮のハムシ類の分類モノグラフ]  
 HENDRIX, S. D., 1980. An evolutionary and ecological perspective of the insect fauna of ferns. *Am. Nat.*, **115**: 171-196. [シダ類につく昆虫類の進化学的・生態学的展望]  
 岩槻邦男編, 1992. 『日本の野生植物 シダ』. vii+311 pp., 196 Pls. 平凡社, 東京.  
 JOLIVET, P. & T. J. HAWKESWOOD, 1995. Host-plants of Chrysomelidae of the World. An Essay about the Relationships between the Leaf-beetles and their Food-plants. xiii+281 pp. Backhuys Publishers, Leiden. [ハムシ科の寄主植物の総説]  
 KATO, M., 1991. Leaf-mining chrysomelids reared from Pteridophytes. *Jpn. J. Ent.*, **59**: 671-674. [ヒラノニセマルトビハムシとムツボシニセマルトビハムシ屋久島亜種の生活史と幼虫形態に関する報告]  
 木元新作, 1979. 琉球諸島のハムシ類—フィールド・ノートより一. 科学の実験, **30**: 844-850. [ルイスコトビハムシ *Manobia lewisi* JACOBY, 1885 の寄主にホシダを記録]  
 木元新作, 1984. ハムシ科. 林 匡夫・森本 桂・木元新作編『原色日本甲虫図鑑 IV』(VII: 438 pp., 72 Pls.): 147-222, Pls. 29-43. 保育者, 大阪. [セマルトビハムシの寄主としてワラビ, ベニシダ, ヤブソテツを挙げている]  
 小宮義璋, 2004. シダの胞子葉に集まるスゲハムシ. 月刊むし, (406): 19. [スゲハムシ (キヌツヤネクイハムシ) *Plateumaris sericea* (LINNAEUS, 1768) 成虫がヤマドリゼンマイの胞子葉に集まるのを観察. 同じシダの胞子が栄養源になっている可能性を示唆]  
 KONSTANTINOV, A. S. & N. J. VANDENBERG, 1996. Handbook of Palearctic Flea Beetles (Coleoptera: Chrysomelidae: Alticinae). Contributions on Entomology, International, **1(3)**: 235-439. Associated Publishers, Gainesville, FL. [旧北区のトビハムシ類の分類ハンドブック]  
 MOHAMEDSAID, M., 2004. Catalogue of the Malaysian Chrysomelidae (Insecta: Coleoptera). 239 pp., Pensoft, Sofia—Moscow. [マラヤ産ニセマルトビハムシ属の 1 種 *Schenklingia biplagiata* (BRYANT, 1948) の寄主にコシダを挙げた]  
 PATRA, B. & S. BERA, 2007. Herbivore damage to ferns caused by a chrysomelid beetle from lower Gangetic plains of west Bengal, India. *American Fern Journal*, **97**: 19-29. [インドのガンジス平野で、ニセマルトビハムシ属の 1 種 *Schenklingia*

- bhaumiki* BASU et SENGUPTA, 1981 の寄主に 10 種のシダ類を記録]
- SAMUELSON, G. A., 1971. Alticinae of New Guinea IV. (Coleoptera: Chrysomelidae). *Pacific Insects*, 13: 513-518. [ヘゴ属の木生シダを寄主とする *Setsaltica* 属 2 新種の記載]
- SAMUELSON, G. A., 1973. Alticinae of Oceania (Coleoptera: Chrysomelidae). *Pacific Insects Monograph*, (30): 1-165. [オセアニアのトビハムシ亜科の総説]
- SAMUELSON, G. A., 1984. Plant associated Alticinae from the Bismarck Range, Papua New Guinea (Coleoptera: Chrysomelidae). *Esakia, Fukuoka*, (21): 31-47. [ニューギニア産トビハムシ科 1 新属 7 新種を含む 4 属 9 種の報告。シダ類を寄主とする種が多い]
- SAMUELSON, G. A., 1994. Pollen consumption and digestion by leaf beetles. In: JOLIVET, P. H., M. L. COX, & E. PETITPIERRE (eds.) *Novel Aspects of the Biology of Chrysomelidae*. (xxiii+582 pp.): 179-183. Kluwer Academic Publishers, Dordrecht/Boston/London. [花粉食のハムシ類に関する概説]
- SUZUKI, K. & Y. MATSUMURA, 2006. New host plants of two Japanese *Zeugophora* species (Chrysomelidae, Zeugophorinae). *Elytra, Tokyo*, 34: 185-188. [日本産モモトハムシ属 2 種の寄主植物選好性に関する論議]
- 鈴木邦雄・松村洋子・石橋美子, 2006. ナミカメノコハムシ (改称) の新寄主植物。甲虫ニュース, (154): 23-25. [広食性のナミカメノコハムシ *Cassida* (*Cassida*) *nebulosa* LINNAEUS, 1758 (カメノコハムシ亜科 Cassidinae) の寄主植物選好性に関する論議]
- 鈴木邦雄・南 雅之・今坂正一・多比良嘉晃・木附嘉理・磯輪亮太, 2008. 日本産ニセマルトビハムシ属 (ハムシ科, トビハムシ亜科) の地理的分布と寄主植物。甲虫ニュース, 161: 22-29.
- 鈴木邦雄・滝沢春雄, 2007. ハムシ科。森本 桂監修『新訂 原色昆虫大図鑑 II (甲虫篇)』(32+526 pp., 196 Pls.): 369-402, Pls. 163-177. 北隆館, 東京。[トホシニセマルトビハムシとセマルトビハムシの寄主に言及]
- 鈴木邦雄・上原千春, 1998. オトシブミ類の寄主植物をめぐる諸問題一付。寄主植物の記録方法に対する二, 三の提言一。福井昆虫, (23): 39-48. [オトシブミ類の寄主植物選好性に関する論議]
- TAKIZAWA, H., 1979. Notes on Taiwanese Chrysomelidae, III. *Kontyû, Tokyo*, 47: 340-351. [台湾産ミワニセマルトビハムシ *Schenklingia miwai* (CHCJÓ 1937) の寄主としてホシダを記録]
- 滝沢春雄, 1994. 木元新作・滝沢春雄, 1994. 『日本産ハムシ類幼虫・成虫分類図説』(xvii+539 pp., 133 Pls.): 365-513, Pls. 89-133. 東海大学出版会, 東京。[シベリア産の *Hippuriphila modeeri* (LINNAEUS) の幼虫がスギナの茎内に潜入することを MEDVEDEV らの論文を引用して解説]
- WHITE R. E., 1993. A revision of the subfamily Criocerinae (Chrysomelidae) of North America north of Mexico. *Technical Bulletin, US Department of Agriculture*, 1805. v+158 pp. +24 Pls. (123 Figs.) [北米産のシダを寄主とするヒメクビボソハムシ属の 1 種 *Oulema concolor* (LECONTE, 1884) に言及]

(鈴木: 930-8555 富山市五福 3190 富山大学大学院理工学研究部生物学教室;  
南: 180-0004 東京都武蔵野市吉祥寺本町 3-17-7)

### ○日本から発見されたカラフトカクムネコメツキダマシ

カクムネコメツキダマシ属 *Melasis* は、北半球に広い分布域を持つ仲間、特徴として櫛歯状の触角、四角い前胸、そして平圧した脛節をもつ。日本を含む北部極東地域からは、これまでにカラフトカクムネコメツキダマシ *Melasis sachalinensis* W. SUZUKI et LUCHT (樺太)、カクムネコメツキダマシ *M. japonicus* HISAMATSU (本州)、シコクカクムネコメツキダマシ *M. shikokuensis* HISAMATSU (本州・四国)、台湾カクムネコメツキダマシ *M. sinensis* LUCHT (台湾)、シモムラカクムネコメツキダマシ *M. tibialis* LUCHT (台湾) の 5 種が知られているが、わずかに記録のある日本産 2 種を除き、原記載以降の記録はほとんどない。また、北海道の採集記録はなく、これまで空白の状態にあった。

筆者は、さいたま市の芳賀馨氏の協力で、これまで記録のなかった北海道において採集された *Melasis* 属の個体を検する機会に恵まれた。標本を調査したところ、触角の形状の違いから本州に生息する既知種 (2 種) とは別種で、樺太から記載されたカラフトカクムネコメツキダマシにたいへんよく似ていることが明らかになった。確認のため、東京国立

科学博物館に所蔵されているカラフトカクムネコメツキダマシのタイプ標本をお借りして詳しく比較したところ、同種であることが確認できたので、ここに記録しておきたい。

報告するにあたり、興味ある種を採集され快く調査を許された埼玉県さいたま市の芳賀馨氏、また東京国立科学博物館所蔵のタイプ標本の調査を許された野村周平博士に厚くお礼申し上げる。

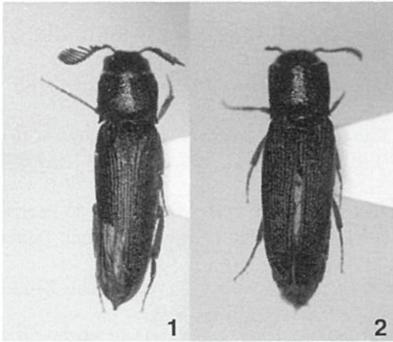
*Melasis sachalinensis* W. SUZUKI et LUCHT, 1983  
カラフトカクムネコメツキダマシ (新称)

*Melasis sachalinensis* W. SUZUKI et LUCHT, 1983:  
41-44, figs. 1-8, pl. 2 (Sachalin: Esutori and Kashiho).

♂. 体長 7.8~8.5 mm, 幅 2.1~2.3 mm. 体は細長く、筒状。体は黒色。触角、脚は茶褐色だが、触角第 2 節はやや明るい。触角は短く、前胸後角に達しない。第 1 節外縁は短い直立毛を備える。第 2 節は短小で幅広く、第 3 節は 2 節の約 2 倍の長さで、4 節より櫛歯状となる。

♀. 体長 7.5~8.75 mm; 幅 2.1~2.3 mm. 触角は第 3 節よりやや強く鋸歯状を呈する。

検視標本。1♂ (Fig. 1), 北海道日高町沙流川源流



Figs. 1-2. *Melasis sachalinensis* W. SUZUKI et LUCHT.  
1, ♂; 2, ♀.

三国沢林道入口付近, 23. VI. 1990, 芳賀馨採集(ダケカバの立ち枯れより); 1♀(Fig. 2), 北海道斜里町海別岳糠真布川本流源流(標高800 m), 4. VII. 1994, 芳賀馨採集(エゾマツの立ち枯れより).

分布 樺太, 日本(北海道[新記録]).

本種は, 日本に生息する本属の他種とは, 触角の櫛歯状の程度が顕著でないこと, 触角第1節の直立毛が短いこと, 脚が茶褐色であることなどの点で識別することができる。

なお, 上記の個体のほかに, 北海道置戸町鹿の子ダム湖で芳賀氏により採集された1雄個体も検することができたが, カラフトカクムネコメツキダマシのタイプに比べ著しく小型で, 触角の形状にも差が認められたため種の確定にはいたらなかった。この個体については, 今後資料を増やした上で再検討したい。

#### 参考文献

- HISAMATSU, S., 1963. Six new species of Eucnemidae from Japan (Coleoptera). *Trans. Shikoku. ent. Soc., Matsuyama*, 8: 26-34.
- 久松定成, 1985. コメツキダマシ科. 黒澤良彦・久松定成・佐々治寛之編著, 原色日本甲虫図鑑(III): 42-51 (pls. 8-9). 保育社, 大阪.
- LUCHT, W., 1982. Zwei neue *Melasis*-Arten aus Taiwan (Col., Eucnemidae). *Entomol. Blätter Biol. Syst. Käfer*, 78: 15-19.
- Suzuki, W. & W. Lucht, 1983. A new species of the genus *Melasis* OLIVIER from Sachalin (Coleoptera: Eucnemidae). *Ent. Rev. Japan, Osaka*, 38: 41-44. pl. 2.
- 鈴木 互, 2003. シモムラカクムネコメツキダマシの雌の記録. 甲虫ニュース, (143): 18.  
(東京都世田谷区, 鈴木 互)

#### ◇アカガネネクイハムシが栃木県さくら市の天然記念物に指定される◇

栃木県さくら市によって2007年12月17日より市内のアカガネネクイハムシが天然記念物に指定された。さくら市内の本種の産地は模式地である旧喜連川町のため池のみであることから, 実質的にこの産地の個体群を指定したものとみられる。現在, 許可なく採集することは条例違反となるのでご注意ください。

今後は具体的な保全活動を行い, 貴重な個体群が存続するようにしなければならない。なお, 本指定に関する窓口はさくら市教育委員会生涯学習課文化振興係である。

(ホシザキグリーン財団, 林 成多)

#### ◇学会の発行者・バックナンバー販売委託先◇

昆虫文献 六本脚

TEL/FAX: 03-5625-6484

E-mail: roppon-ashi@kawamo.co.jp

URL: <http://kawamo.co.jp/roppon-ashi/>

#### 甲虫ニュース 第161号

発行日 2008年3月30日

次号は2008年6月下旬発行予定

発行者 新里達也

編集者 鈴木 互(編集長), 長谷川道明, 川島逸郎, 奥島雄一, 吉富博之

発行所 日本鞘翅学会

〒169-0073 東京都新宿区百人町 3-23-1

国立科学博物館昆虫第2研究室

電話 03-3364-2311

原稿送付先(甲虫ニュース) 鈴木 互

〒156-0053 東京都世田谷区桜 3-14-13

電子メール: elater@b08.itscom.net

印刷所 (株)国際文献印刷社

年会費 2008年度7,000円(一般会員)

郵便振替口座番号 00180-3-401793

ホームページ <http://www.soc.nii.ac.jp/jsc2/index.html>

#### 昆虫学研究器具は「志賀昆虫」へ

日本ではじめて出来たステンレス製有頭昆虫針00, 0, 1, 2, 3, 4, 5, 6号, 有頭ダブル針も出来ました。その他, 採集, 製作器具一切豊富に取り揃えております。

〒150-0002 東京都渋谷区渋谷1丁目7-6

振替 00130-4-21129

電話 (03) 3409-6401 (ムシは一番)

FAX (03) 3409-6160

(カタログ贈呈) (株)志賀昆虫普及社